

---

# 魔法少女リリカルなのは～運命を変えし転生者～

ロキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜運命を変えし転生者〜

### 【Nコード】

N4122X

### 【作者名】

ロキ

### 【あらすじ】

ある一人の青年が自分の命と引き換えに一人の少女の命を救った。偶然現世を観察していた女神は人一人の運命を変えた青年の行為に感心し、青年に第二の人生を生きるチャンスを与えた。青年は女神から力と二人のパートナーを得て新たな世界を生きることになった。転生した世界は魔法少女の世界だった。その世界の原作を知る青年は女神からもらった力を使い二人のパートナーと共に少女たちを悲しみの運命から救うことを決意する。

魔法少女リリカルなのは〜運命を変えし転生者〜 始まります。

## プロローグ（前書き）

初めましてロキです。これまでたくさんの二次小説を見て僕も書き  
たくなり今回初投稿しました。

何分小説初心者ですので駄文になるかもしれませんが僕なりに精一  
杯やっと思っています。

もし興味のわいた方は読んでみてください。楽しんでいただけるよ  
うがんばります。  
ではどうぞ。

## プロローグ

「ふぁーあぁあ」

よく晴れた空、それはもう晴れすぎではないかというぐらいに青く澄み渡った快晴の休日、俺はあくびをしながらあてどなく街を歩いていた。

せっかくの休日に家の中であちこちしているのももったいないと思いい外に出てきたのはいいが特に行きたいところがあるわけでもなくぶらぶらしているのも結構暇なものだ。

「さあ〜てどうするかなあ。映画でも見に行こうかな。今ってなんかおもしろい映画とかやってたかな？」

俺は映画館のほうに向かって歩き出したが、そこでふと足を止めた。

「ん？」

視界の端に転がったボールを追いかける女の子が見えた。女の子はようやく止まったボールを拾い上げた。しかしそこに車が走ってきた。

「んなっ!？」

俺は目を見開いた。

「くそっ!!!」

気がついた時には女の子のほうに走っていた。このときは自分でも驚くぐらいのスピードが出ていたと思う。

「うおおおおお!!!」

俺は勢いを殺さずにそのまま女の子を抱きかかえた。それと同時に背中に凄まじい衝撃が襲いかかり俺は女の子を抱いたまま衝撃に従って道路を三、四回ほど転がった。ようやく止まると全身にとてつもない激痛がはしった。そんな激痛のなか俺は腕の中の女の子を見た。どうやら怪我らしい怪我はしていないようだ。

（ああ・・・大丈夫・・・夫・・・そうだ。よか・・・った）

そう思ったのを最後に俺の意識は闇に落ちた。

## ブログ（後書き）

と、まあこんな感じです。いかがでしたでしょうか？  
この三連休は投稿できると思います。それではまたお会いしまし  
う。

## 第一話 女神との邂逅（前書き）

遅くなってしまい大変申し訳ありません。

このような作者ですがどうか最後までお付き合いをお願いします。

それでは第一話始まります。

## 第一話 女神との邂逅

S i d e ???

俺はいつたい、どうなったのだろう？

わからない。なにも思い出せない。

ここはいつたいどこなのだろう？なんだかすごく心地良い感じがする。まるで宙にふわふわと浮いているようなそんな感じが。

ああ、できるならずっとこうしていたい。なにも考えずにこの心地良さに甘えていたい。

「……………」

ん？いま何か聞こえたような……？

気のせいかな？

「……………ねえ……………きて」

あ、また聞こえた。どうやら気のせいじゃないみたいだ。

「ねえ……………おきて」

誰かが俺を呼んでる？でも誰が？

「ねえ、おきてったら〜」



あ、今度ははっきりときこえる。誰だろう？すごくきれいな声だ  
けど。

「ねえ、ちょっと、きこえてる？」

ああ、やっぱりすごくきれいな声だな。こんな声に呼ばれるのも  
なんだかわるくないな。

「おい、もしも？」

いったい誰が呼んでいるのだろう？俺はつつすらと目を開けよう  
としたとき。

「もうっ、いい加減におきなさー！ーい！ー！」

「おうわあああっ！！？」

いきなり耳のすぐ近くで叫ばれて俺は飛び起きてしまった。

「なっ、なんだ！？だれだ！？」

俺は慌ててあたりを見回した。

「あ、やっとおきた。もうっ、君いくらなんでも寝過ぎだよ？」

俺は声のするほうを向くとおもわず目を見開いた。

「でも、すごく気持ちよさそうな顔して寝てたね。フフフ。とり  
あえず、おはようかな？」

そこにはかるいウェーブのかかった長い金色の髪にサファイアの  
ように透き通った青い瞳をして神話なんかに出てくる神様なんか  
着るような白い服を着て背中に大きな鳥のような純白の翼を生やし  
たとても綺麗な女の人がいたからだ。

「あ、あの・・・あなたはいたい・・・？」

俺はその女性に面喰らいながらもなんとか質問をした。するとそ  
の女性はキョトンとした顔をした。

「?・・・あつ、そつかそつかまだ自己紹介してなかったね。  
ごめんごめん」

苦笑しながら謝る女性。

「えーっと、それであなたは？」

俺はもう一度質問をする。

「んんっ。それじゃあまずは自己紹介を。初めまして勇気ある人間  
君。私の名前はルティア、女神ルティアよ。よろしくね」

彼女は輝くばかりの笑顔でそう言った。

## 第一話 女神との邂逅（後書き）

かなりの間が空いてしまい申し訳ありません。

当分はもしかしたらこんな感じでやっていくことになるかもしれませんが。

このような駄目作者で恥じ入るばかりですが、自分なりに精一杯頑張っていると思います。

## 第二話 とりあえず現状確認（前書き）

ロキです。休日なので連日投稿してみようと思って書きました。

女神と出会った主人公。はたして彼の運命はどこへ向かうのか？

それでは第二話始まります。

## 第二話 とりあえず現状確認

Side???

「・・・・・・・・・・は？」

俺はそんな間の抜けた声を出してしまった。しかしそれも無理はないと思う。俺の耳がおかしくなければ、今この女性は自分を女神だといった。普通に考えればこの女性には今すぐ精神科に行くことをお勧めするのだが、彼女の恰好や何より背中の羽は幻覚でもない限り間違いなく彼女の背中から生えているように見える。つまりこの人？は本当に・・・・

「ええ、本当に、正真正銘、間違いなく、本物の女神よ」

つて、え！？今俺が何を考えてるのか読まれた！？

「そりゃ読めるわよ。だって女神だし」

また読まれた！？

「じ、じゃああなたは本当に・・・・・・・・・・女神さま？」

「だから、そう言ってるでしょう。この背中の翼が見えないの？」

そう言っただけで彼女は背中の翼を指差した。

「ああ、はい。大丈夫です。見えています」

俺はとりあずそう言っておく。

「うん。よろしい」

彼女は満足げに頷く。

「あのく、ところで……」

俺は体を起こした状態のまま目の前に立つ女性を見上げた。

「うん？」

「あなたが女神様というのは、まあ百歩譲って認めます。で、それはいいとして此処はいつたいどこなんですか？どうして俺はこんなところにいるんですか？」

俺はまずいちばん気になっていることを聞いてみた。

「うん、まあちゃんと説明するけど、そのまえに聞いてもいい？」

「はい？」

「きみ、自分がどうなったのか憶えてない？」

「え？」

俺は女神（たしかルティアという名前だった）ルティアさんの質問を聞いて言葉に詰まった。

（俺がどうなったか？あれそういえば俺はなにか忘れているような  
なんだ？俺はなにを忘れているんだ？）

俺は頭を抱えて必死に記憶を甦らせようとした。すると俺の脳裏  
にズキツという痛みとともに一つのヴィジョンが浮かんだ。自分の  
腕に抱かれる小さな少女、自分と少女に迫りくる車、それらを思い  
出した俺は

（ああ・・・・・・・・そうか。俺は・・・・・・・・）

「俺は・・・・・・・・死んだんですね？」

つぶやくようにそう言う。

「・・・・・・・・ええ。そうよ」

ルティアさんは複雑そうな表情で答えた。

「そうですか。・・・・・・・・あのルティアさん？」

「ん？・・・・・・・・なに？」

「あの子は・・・・・・・・俺がかばった女の子はどうになりましたか？」

俺がそう聞くとルティアさんは少し驚いたような表情のあと笑顔  
で答えた。

「大丈夫。あの子は無事よ。あなたのおかげでかすり傷ひとつない  
わ」

「そうですか。……………よかった」

俺は心底から安心する。そっか……………あの子は無事か……………。

「あなたは……………変わった人間ね」

ふとルティアさんが言ってきた。

「え？」

「だって、自分が死んだことよりも他人の心配をするんだもの」

ルティアさんの言葉に俺は苦笑する。

「ああ……………まあ、そうですね。でも俺の命ひとつで誰かの命を護れたなら俺はそれで満足です。……………ま、自己満足ですけどね……………」

俺の言葉を聞いたルティアさんは

「……………あなたは」

「？」

「……………良い人間なのね」

優しい笑顔でそう言った。

「……………!!?」



その言葉に俺は自分の頬が熱くなるのを感じた。自分の赤面した顔を見せたくなくて顔をそらす。こういうことを面と向かって言われるのはやはり恥ずかしいものである。

「うん。よし決めたわ!!」

ルティアさんは突然嬉しそうにいった。

「へ？」

俺はいきなりのルティアさんの声に驚いた。するとルティアさんは俺に満面の笑顔で言ってきた。

「ねえ、あなた……転生って興味ない？」

## 第二話 とりあえず現状確認（後書き）

今日はとりあえずここまでとします。

次回は主人公が女神から力を渡されます。楽しみにしててください。

ではまた次回お会いしましょう。

最後に感想を送ってくれた魁斗さん。ありがとうございました。お互いに頑張っていきましょう。他のみなさまもこれからできればどうか応援してください。感想などがあつたらどんどん送ってきてください。いつでも大歓迎です。それではまた。

### 第三話 俺の性分（前書き）

こんにちはロキです。つい調子にのってまたも連続投稿してしまいました。

少し調子にのりすぎという気もしますが。

まあ、暖かい目で見てやってください。

では第二話始まります。

### 第三話 俺の性分

S i d e ???

「・・・・・・・・え？転生・・・・・・・・ですか？」

俺はルティアさんの唐突な質問に戸惑ってしまう。それはそうだろう。いきなり転生といわれてもどこたえればいいのやら。

「あの・・・・・・・・ルティアさん」

「ん？」

「転生って、あの転生ですか？前世の記憶をもったまま生まれ変わるっていう」

俺はそんな質問をルティアさんにしたみた。

「ええ、そうよ。その転生」

ルティアさんは変わらず笑顔で答えた。

「でも、どうして俺を？」

俺が聞くとルティアさんは俺と目線を合わせるように座った。

「ん、まあぶっちゃけると私があなたのこと気に入っちゃったっていうのが主な理由なのよ」

「ルティアさんが俺を気に入った？」

鸚鵡返しに言う。

「そう。だってあなた今時の人間しては珍しいんだもの。今の時代に自分の身を投げ打ってでも他人を助けようとする人なんて中々いないわよ」

「ああ、まあそうかもしれないね。でもこれが俺の性分ってやつなんです」

そう俺は物心ついたときからこんな感じだった。目の前で誰かが泣いていればどうしても見過ごすことができなかった。迷子の子供を見かけたら一緒に親を探してあげたり、不良に絡まれてる人を見たらすぐさま助けに入ったり、本当になんと酷い目にあってもこの性格は直らなかった。でもそれでもいいかと思う自分もいた。やっぱり俺は人の泣いてる顔よりも笑ってる顔のほうが好きだから。

「・・・そう」

ルティアさんがまた優しい表情で見つめてくる。あれ？もしかしてまた心を読まれた？うわゝ恥ずかしいゝ

「んんっ、そ、それで転生の話ですけど」

俺は軽く咳払いをして話をもとに戻そうとした。

「ああ、そうだったわね。で、どうする？」

「そりゃあ、確かにちょっと興味はありますがけど」

確かに第二の人生を与えてくれるというのなら是非ともお願いしたいところだ。

「ちなみに行き先の世界はこっちで決めることになるからね」

「え？俺に選択権なしですか？」

「ええ。こればかりは決まっていることだから。ごめんなさいね」とルティアさんは申し訳なさそうな顔をする。そんな顔をされては文句も出ない。

「わかりました。で、どうやって決めるんですか？」

「ああ、それはね、これを使うの」

そう言つとルティアさんはどこからか丸い穴の開いた四角い箱を取り出した。

「あの、それは？」

俺は箱を指して聞いた。

「この箱の中には色々な並行世界の紙が入っているの」

「並行世界って、パラレルワールドのことですか？」

「そうよ。ただ普通の世界とも違う・・・例えばそうねあなたの世界にあるマンガやアニメに酷似した世界とかね」

「へえ、すごいですね」

俺は率直な感想を口にした。

「それじゃあ、さっそく決めちゃいましょうか？」

「あ、はい。お願いします」

俺が答えるとルティアさんは手を箱の中に入れた。俺はどんな世界になるのだろうと内心ワクワクしていた。それはそうだろう俺の世界にあるマンガやアニメの世界に行けると言われてワクワクするなというほうが無理がある。自慢ではないが俺はこれでも生前かなりのマンガやアニメを見ていたのでその方面の知識にはけっこう自信があったりする。

「んーっと……それっ」

ルティアさんは箱から一枚の紙切れを取り出して見た。

「えーっと、なになに、ふんふん、なるほど。あなたの転生先が決まったわよ」

「どこですか？」

俺が聞くとルティアさんはにっこりと笑って

「あなたの転生先は……リリカルなのはの世界よ」

そう答えた。

### 第三話 俺の性分（後書き）

申し訳ありません。力を与えられるところまで書きたかったのですが、書いているうちにこうなってしまう。中々上手くないものですね。次回こそは主人公の能力が決まります。楽しみに。

感想、意見等お待ちしております。ではまた次回。



#### 第四話 与えられし力 そして旅立ち（前書き）

．．．．．なんというかその．．．．．やっぱり調子に乗りすぎですよ、これ。でもどうしても、書きたいって衝動が抑えられなくて書きちゃいました。

一日のうちに三話連続って．．．まあ、他にもやってる人はやってますよね？

転生先も決まりいよいよ主人公が力を渡されます。

それでは第四話始まります。

#### 第四話 与えられし力 そして旅立ち

S i d e ? ? ?

「リリカルなのはの世界って……マジですか？」

俺はおもわず聞いてしまった。

「ええ、マジよ。あら、もしかしてこの作品知ってるの？」

「あーはい。ていうか俺の好きなアニメの上位ランクに入ってるし」

そう。何を隠そう魔法少女リリカルなのはシリーズは俺が生前嵌っていたアニメのひとつなのである。まさかその世界にいけるなんて。ああ、やばい興奮すぎて心臓がバクバクしてる。

「へえ、そうだったんだ。運がいいわねあなた」

死んでしまったこの状況で運がいいと言われてもなんか複雑である。

「それじゃあ次に、あなたに力をあげなきゃ」

「へ？力？なんの？」

「もちろん、その世界で生きていくための力よ」

ルティアさんの言葉に俺ははっとする。これはもしかしたら……。

「それでどんな力が『あの、ルティアさん』・・・？なに？」

俺はルティアさんの言葉を遮り聞きたいことを聞く。

「その世界で原作を変えることってできますか？」

これが俺の聞きたいことだった。初めてリリカルなのはの作品を見たときからずっと思っていたことだった。もし俺に力があつてこの世界に行けたなら彼女たちの悲しい運命を変えたいと。なのはは幼少時代に孤独を味わいそれが原因で無茶をして堕ち、一度は魔導師を断念しかけた。フェイトは大切な母親と分かり合えぬまま母と姉を失うこととなり、はやては共に生きられるはずだったリインフォースと永遠の離別による苦しみを味わった。

たしかにそれ乗り越えていったからこそ彼女たちはあそこまで強くなることができたのだろう。しかし彼女たちのあの小さな肩にあれほどの苦しみを背負わせるというのはどうしても俺には納得がでなかった。あんなものわずか九歳の女の子に背負わせていいものじゃない。救いたいと思った。護りたいと思った。例えばそれが偽善でも、エゴでも、自己満足でも、それでもいい。彼女たちが笑顔でいてくれるのなら。

「あなたは、変えたいのね。彼女たちの・・・運命を」

ルティアさんは真剣な表情で言ってきた。

「・・・はい」

俺はそれに同じく真剣な表情で答える

「やっぱり……あなたは優しい人だね」

「そう……なんでしょうか？」

「ええ。それもとびっきりの……ね」

その時のルティアさんの笑顔はまさに聖母のように慈愛に満ちていた。

「さっきの質問の答えだけど、大丈夫よ。さっきも言ったけどその世界はアニメの世界そのものってわけじゃなくて、そのアニメに限りなく酷似した並行世界だから。だからどんなふうに原作を壊してくれても問題ないわよ。すきなだけ暴れちゃっても」

と今度はルティアさんはいたずらっぽく笑う。

「わかりました。ありがとうございます」

俺はとりあえず安心する。

「で……あなたにあげる力なんだけど」

「はい？」

「こんなのはどうかしら？」

ルティアさんは俺に近づいて耳打ちをする。

「じしよししよ」

「…………え！？いいんですかそんなの！？」

俺はルティアさんの提案した能力に驚いてしまう。まあたしかにその能力なら問題なく原作ブレイクもできるだろうが。

「いいのよ。いったでしょあなたのこと気に入ったって」

彼女の屈託のない笑顔におもわずこっちまで顔が緩む。

「わかりました。じゃあお言葉に甘えてその力でお願いします」

「ええ！まかせてちょうだい！！」

そういつてルティアさんは俺に向かって両手をかざす。するとルティアさんの両手から光が溢れてきてその光は俺の体の中に吸い込まれるように入っていった。

「うん、これでいいわ」

「え、もう終わりですか？」

なんだかずいぶんあっさりしてるな。まあいいけど。

「あ、それからあなたの前の名前はもう使えないから新しい名前が必要よ」

「あたらしい名前ですか？そうですね」

俺はしばらく考えこむ。

「う〜ん………よし、これにしよう」

「なんて名前にしたの？」

「燎、俺の新しい名前は神薙かんなぎ 燎りょうだ」

ちよっと中二病くさいかなとは思っただけどまあいいだろう。

「燎……良い名前ね」

「あ、ありがとうございます」

笑顔で言われてつい赤面する俺。

「じゃあ、準備もできたことだし、そろそろ行く？」

「ああ、はい。お願いします」

俺は何故か背筋をのばして返事をする。

「ああ、そうそう。最後にもう一つだけ言っておかないと」

「？なんですか？」

「あなたが世界に転生する影響でその世界になにかしらのイレギュラーがおきる可能性があるの」

「イレギュラーですか？それはどんな」

「ごめんなさい。それは私にもわからないの。でもくれぐれも注意してね」

心配そうなルティアさんに俺は笑って言った。

「大丈夫ですよ。俺にはルティアさんからもらった力がありますから」

「燎……」

「それじゃあ、いつてきます。色々ありがとうございます」

「クスツ、ええ。いつてらっしゃい。あなたみたいな優しい人にあえて嬉しかったわ」

ルティアさんの笑顔に見送られ俺は光に包まれた。

こうして俺の異世界での第二の人生が幕を開けた。

#### 第四話 与えられし力 そして旅立ち（後書き）

ついに転生です。ここまでけっこう長くなってしまい申し訳ありませんでした。

主人公の能力についてですが、ネタバレとして主人公紹介のプロフィールにて明かそうと思います。楽しみにしていただいた方々、すみませんでした。

それではまた次回お会いしましょう。



## 第五話 到着 魔法世界（前書き）

どうもロキです。

少し間が空いてしまいましたが投稿できました。

やはり実際に小説を書いてみるとその難しさがよくわかります。

しかしこれも小説製作の醍醐味というものでしょうか。

では第五話始まります。

## 第五話 到着 魔法世界

S i d e 燎

暖かい日差しを感じて俺は目を開ける。

「うん．．．ここは？ああ、そうか転生したんだったな」

俺は体を起こして立ち上がった。どうやらここは森の中みたいだが俺はリリカルなのは世界のどこに転生したんだ。

（ああ、こんなことなら場所を決めておけばよかったな．．．ま、しかたないか）

思わず愚痴をこぼしたが過ぎたことと思って気を取り直すことにした。

「さて、まずはここがどこなのか確認しないとな．．．にしてもなんか視線が低いような．．．!?」

俺は自分の手を見て目を疑った。

「な、なんだ?．．．これ?」

その手はどうみても大人の手ではなく五、六歳ぐらいの子供の手だった。

「どうなってんだ?．．．ん?」

俺は半ズボンの右のポケットになにか入っているのを感じて手を入れてみた。ちなみに今の俺の服装は俺が前の世界で着ていた半袖のシャツを今の俺のサイズに縮めてジーンズを半ズボンにしたのだ。

「これは・・・紙・・・？」

その紙には綺麗な字が書かれていた。

「ルティアさんからのメッセージ・・・か？」

俺は紙に書かれた字を読んだ。そこにはこう書かれていた。

『療へ、これを読んでいるということは無事に転生できたということね。何よりだわ。』

これを入れたのはあなたに言い忘れたことと私からいくつかサービスがあることを伝えるためです。

まず、いまのあなたの体はちょうど五歳くらいの体になっていること、つぎにあなたを海鳴市から少し離れた森のところにあなたを転生させたこと、それと能力を使って鏡を作って自分の顔を見てください。きっと驚くと思います』

顔・・・？顔がどうかしたのだろうか？とりあえず俺は書かれているとおりに能力で鏡を作って自分の顔を映した。

「！？・・・な、ななな・・・」

俺はまたしても自分の目を疑ってしまった。

「なんじゃこりゃあああああああ！！！！？」

絶叫する俺、しかしそれも当然だ。鏡に映った俺の顔はどこからどう見ても俺の前の世界で大人気のライトノベル、灼眼のシャナのシャナの顔になっていたのだから。・・・・髪こんなに伸びてたのか、どうりで頭が重いと・・・・じゃなくて！！

「はっ、ま、まさか・・・・」

バツ！

俺は慌てて自分の股間に手をあててみた。

「はあ、よ、よかった。ちゃんとある」

俺は安堵のため息を吐いた。確かに男の証しの感触がしたからだ。性転換の可能性がないことを確認した俺は手紙の続きを読むことにした。

『ちなみにどうしてその姿にしたかというと私があ作品を好きだから それに最近じゃそういう女の子みたいな男の子が流行ってるってきいて、ついやつちゃった・・・・てへっ』

ルティアさん・・・・Orz

というかそんな理由で勝手に他人の外見を変えないでほしい。

気を取り直して続きを読む。

『それで次にサービスの件だけど流石にあなた一人じゃ色々大変だろうと思ってあなたにパートナーを送っておいたわ。天道宮にいると思うから後で会いに行つてあげて。ちなみに天道宮のほうもサービスだから。修行場にするなりなんなり好きに使つて。多分今海鳴市の海上に浮いてると思うわ。行きたいときは「開け、天道宮の扉」で行けるようになってるから。あ、もちろんそれとは別にあなたとパートナーの住む家もちゃんと海鳴市に用意してあるから安心して。あと今の時期は無印が始まる四年くらい前だから今のうちになのはちゃんに会つておいたほうが良いと思うわ。それじゃ第二の人生思う存分楽しんでね　女神ルティアより』

ルティアさんいくらなんでもちよつとサービスのしすぎじゃないか。つていうか天道宮つてあれ管理局からみたら完全にロストロギアだよな？・・・大丈夫か？それにパートナーか・・・どんなやつなんだろ？

「まあとにかく、まずは天道宮に行つて俺のパートナーとやらに会いに行くとするか」

そういつて俺は天道宮に行くためのキーワードを唱えようとする。つーかこれ某妖精の尻尾の星霊魔導師のお嬢様の呪文と同じだよな？俺達の世界のマンガやアニメつて神様の世界でも人気があんのかな？

「ま、それはともかく行くか。【開け、天道宮の扉】」

俺がキーワードを唱えると地面に灼眼のシャナの自在式のような紋章が浮かび上がりその紋章から光があふれ俺は一瞬のうちに転移した。

## 第六話 合流 二人のパートナー（前書き）

どうもロキです。やっと更新できます。小説を書く時間というのはとれそうでとれないものだ、最近思います。

まあ、それはさておき

無事転生した燎。女神ルティアから送られてきた彼のパートナーとは？

彼のデバイスも登場します。

では、第六話始まります。

## 第六話 合流 二人のパートナー

S i d e 燎

ルティアさんからの手紙を読んで俺はパートナーに会うために天道宮にやってきた。転移が終わったのを感じて目を開けてみるとそこには周り一面を湖に囲まれた古めかしくも荘厳な西洋風の城であった。

「ここが……天道宮……か」

- - 天道宮：灼眼のシャナに登場する宝具の一つ、その全体を泡のような異界秘匿<sup>クリュプタ</sup>の聖室により覆い隠し、内に在るものの姿と気配を外界より完全に遮断し、自在に空を浮遊する移動城砦。紅世の王、髓の楼閣ガヴィダが建造 - -

「うわー、実際に見てみると本当にでかいな」

俺は生の天道宮を見ることができ、感動してしまった。

「つと、いまはそれよりも、パートナーを探さないと」

ここに来た本来の目的を思い出し、足を進めようとしたら、俺の目の前にふわっと二つの人影が下りてきた。

「うわ!？」

俺は驚いて一歩後ずさった。

「お待ちしていたのであります」

『会合期待』

その人影の片方から二人分の声が聞こえてきた。・・・あれ？今の声って、この人もしかして・・・

その二つの人影は片方は丈長のワンピースに白いヘッドドレスとエプロンを纏った一見してメイドとわかる装い。肩まで切りそろえた髪に、無表情な端正な顔立ち。

「ほう、お前が私たちのマスターか、男と聞いていたんだが、違ったか？」

と、もう片方の人影の美しい金色の髪にゴスロリような服の上に黒いマントを着た十歳前後の可愛らしい少女が外見に似合わない話し方で聞いてくる。・・・ってこの子は・・・

そう、俺の前に現れたのは、万条の仕手ヴィルヘルミナ・カルメルと真祖の吸血鬼エヴァンジェリン。A。K。マクダウエルだった。

- 万条の仕手ヴィルヘルミナ・カルメル：灼眼のシャナの登場人物。夢幻の冠帯ティアマトのフレイムヘイズ。何万ものリボンを自在に操り敵を翻弄しながら戦う戦法を得意としており、まるで舞い踊るように戦う様から他のフレイムヘイズや紅世の徒からは戦技無双の舞踏姫の異名で知られている。シャナの育ての親の一人で弔詞の詠み手マージョリー・ドーとは飲み友達 -

- 真祖の吸血鬼エヴァンジェリン。A。K。マクダウエル：魔



法先生ネギま！の登場人物。外見は十歳位の可愛らしい少女だが正体は数百年の年月を生きてきた吸血鬼の真祖である。主人公のネギの父ナギに惚れて自分のものにしようとしたが返り討ちにあい登校地獄の呪いを掛けられ麻帆良学園に強制的に入学させられる。今は呪いのせいで力が弱まっているが、かつては闇の福音や多くの異名で恐れられた悪の魔法使い。ネギとは最初は敵同士だったが紆余曲折の末ネギを気に入り自分の弟子にする。いまだにナギに惚れている――

どうしてこの二人が・・・？ま、まさか・・・

「あ、あの、えっと・・・君たちが俺のパートナー・・・なのか？」

一応、俺は二人に聞いて確認をしてみる。

「そのとおりであります」

『正鵠』

「ああ。私たちがお前のパートナーのユニゾンデバイスだ」

「えっ？ユニゾンデバイス！？」

俺はエヴァンジェリンの言葉を聞いて驚いた。この二人がユニゾンデバイスだなんて。

「それ・・・どうということ？」

「その言葉のとおり、私たちは本人というわけではなく、女神によ

ってヴィルヘルミナやエヴァンジェリンを素に作られたあなたのためのデバイスというわけであります」

「そ、そうなんだ」

にわかには信じ難い話だけど、ルティアさんならやるだろうな・  
・と納得している自分もいる。

「それともう一つ、女神からあなたに渡してほしいと頼まれたものがあるのであります」

「え？なに・・・？」

ヴィルヘルミナはエプロンのポケットに手を入れて何かを取り出してその手を俺のほうに向ける。

「これなのであります」

ヴィルヘルミナが出したものは黒い宝石に金の輪を意匠したペンダントと群青色の珠に金の鎖をつけたブレスレット。

これ・・・ペンダントのほうは明らかに神器コキートスだけど、ブレスレットのほうはわからないな。

「ヴィルヘルミナ・・・って呼んでいいんだよね？このペンダントとブレスレットは？」

「マスターのお好きなように。この二つはマスターの専用デバイスなのであります」

「俺のデバイス？」

「ああ、女神がわざわざお前のために作った特注品だ」

とエヴァンジェリンが答える。

まさか専用デバイスまで作ってくれるとは……ルティアさんサ  
ービス精神旺盛すぎじゃあ……

「ま、せっかくだし、好意に甘えようか」

俺はヴィルヘルミナからデバイスを受け取る。すると……

『お初にお目に掛かる、そなたが我が主なのだな？』

『ほおー、こりやまたずいぶんな別嬪さんだな！……ほんとに  
男か？』

受け取ったデバイスが話しかけてきた。この声、ペンダントのほ  
うはアラストールでプレスレットのほうはマスコシアスか？

「ああ、俺は神薙燎。よろしくな」

『うむ。では主よ、さっそくマスター認証をせぬか？』

『おつ、そうだな。はええとこ済ませちまおうぜ？』

「ああ、そうだな」

二人？の言葉に頷く俺。

「では、我々も」

「そうだな。この際全員一緒に済ませないか？マスター」

全員一緒って・・・まあ、そのほうが手っ取り早くていいか。

「わかった。全員一緒に認証しよう」

エヴァの提案に賛成して俺はペンダントとブレスレットを両手に持ちヴィルヘルミナとエヴァの前に立つ。

俺は魔法陣を展開する。

「マスター認証、神薙療 デバイス名設定 インテリジェントデバイス アラストール、マルコシアス ユニゾンデバイス ヴィルヘルミナ・カルメル、エヴァンジェリン」A「K」マクダウエル」

『認証完了 我は今より神薙療を主と認める。我が紅蓮は主に仇なすすべてを焼き尽くさん』

『認証完了 よろしくな我が爪牙の担い手、神薙療。我が爪牙はいかなる敵おも引き裂き食らい尽くす』

『認証完了 あなたの道の果てる時まであなたと共に行くことを誓うのであります』

『認証完了 お前を主と認めよう、坊や。お前を害そうとする者は誰であろうとを永久の闇に落としてやるう』

「・・・ああ、みんな、これからよろしくな!!」

俺は精一杯の笑顔をこれから一緒に戦っていく仲間たちに向けた。

## 第六話 合流 二人のパートナー（後書き）

どうもロキです。いかがでしたか？

なぜヴィルヘルミナとエヴァにしたのかというと・・・ぶっちゃけ私が好きだからです。

まあ、こんな感じで今後も書いていきます。何卒応援をお願いします。

ではまた次回お会いしましょう。

## 主人公&デバイス陣 プロフィール（前書き）

というわけでプロフィール作ってみました。

ネタばれも含みますがよかったら見てください。

## 主人公&デバイス陣 プロフィール

主人公

名前：神薙燎 かななぎりょう

性別：男（の娘）

年齢：20歳 5歳

容姿：灼眼のシャナのシャナ

能力：超越神技 ちようえつしんぎ - 自分の知っている技や能力を全て使える。例：マンガやアニメの技等、他にも自分で編み出したオリジナルの技、能力も使用可能。

幻想神具 げんそうしんぐ - 頭に思い描いた道具をそのまま作り出すことができる能力。Fateの宝具やネギまのアーティファクト等。オリジナルの武器を創造することも可能。

戦神化 せんしんか - 自分の能力を完全解放する奥の手、身体能力や魔力値なども測定不能となり世界の理から外れた存在となるためどんな魔法や技も無効化されてしまう。ただし一度使うとその反動で二十四時間一切の能力が使えなくなってしまう。ただし身体強化などは可能。

身体能力：EX



魔力値：EXランク

魔導師ランク：SSSランク

魔力光：炎と見紛う紅蓮

バリアジャケット：黒いアンダーシャツとズボンの上に夜笠を着た姿

備考：車に引かれそうになった少女を助けた代わりに死んでしまったが、たまたま現世を観察していた女神ルティアにその行為を認められ、リリカルなのはの世界に転生することになった青年。性格は優しく、目の前で困っている人を見るとどうしても放っておけないお人好し。生前はかなりアニメやマンガが好きでリリカルなのはシリーズもよく見ていたため原作には詳しい。よく不良に絡まれていた友人やクラスメートを助けていたため、素手の殴り合いに自信がある。与えられた能力を使いなのはたちを悲劇の運命から救うために奮闘する。戦闘で本気を出すときは炎髪灼眼の打ち手の姿になる。

デバイス陣

・アラストール：インテリジェントデバイス

形状：金の輪が意匠された黒い宝石のペンダント（まんま神器コキュートス）

性格：堅物で生真面目、しかし主である燎をいつも心配している。燎を自分の主として全幅の信  
頼をおいている。

・マルコシアス：インテリジェントデバイス

形状：群青色の珠に金色の鎖をつけたブレスレット

性格：騒がしく無作法で下品だが仲間思いで情に厚い。燎のことをからかいつつも最高の主だと認めている。

・ヴィルヘルミナ・カルメル：ユニゾンデバイス

外見：灼眼のシャナのヴィヘルミナ

性格：無表情で無愛想に見えるが本当は情け深く感情的、礼儀正しく語尾に「〜であります」をつける畏まった話し方をする。常に燎の傍らに控えており、燎のためならばいかなる危険

も厭わない。燎の笑顔に魅了されてしまい主従を越えた想いを燎に抱いているが普段は鉄面皮で隠している。作られる際ルティアによって少しばかり改良されたため原作のヴィ

ルヘルミナと違い料理が得意。

能力：原作と同じ数万本のリボンを操って戦う。本気を出すときは専用デバイス、ティアマト - を周縁に鬣のようなリボンがはえた狐のような仮面に変化させる。ユニゾン時には燎

がティアマトーの仮面をつけヴィルヘルミナの能力を使えるようになる。その際燎の髪の色は桜色になる。

・エヴァンジェリンⅡAⅡKⅡマクダウェル：ユニゾンデバイス

外見：魔法先生ネギまのエヴァンジェリン

性格：尊大な性格で主である燎に対しても同じように振舞うが、内心では燎を唯一無二の主として認めている。傍若無人なように見えるが弱者を蹴るような行為は決してせず、涙も

ろい一面もある。ヴィルヘルミナと同じように燎の笑

顔に魅了され惚れてしまう。何とか平静を保てるよう

に日々苦勞している。吸血能力はあるが衝動はない。

能力：主に原作と同じネギまの氷系と闇系の魔法を使用する。他にも補助程度に幻術なども扱える。補助といっても

ティアナのそれとは段違いのレベル。ユニゾン時には燎の髪が銀髪になり氷属性と闇属性の魔法の威力が数十倍に上がる。

## 主人公&デバイス陣 プロフィール（後書き）

これが主人公とデバイス陣の紹介です。いかがでしたか？

自分でも少しチート過ぎかとも思ったのですが、これでなんとかやっています。

それではまた次回お会いしましょう。

## 第七話 孤独の少女に救いの手を（前書き）

ついに主人公が魔王の少女と出会います。

ここまでけっこう掛かりましたがようやくです。

はたして主人公は少女を孤独から救い出せるのか？

では第七話始まります。

## 第七話 孤独の少女に救いの手を

S i d e 燎

無事にマスター認証を済ませた俺たちは天道宮から転移して、ヴィルヘルミナの案内でルティアさんが用意してくれた家へと向かった。

途中、ヴィルヘルミナとエヴァの顔が赤いような気がしたが、気のせいだろうか。

そして、目的地の家に着いてみると、なんとそこはF a t e / s t a y n i g h tの衛宮士郎の家だったのだ。

．．．．．ルティアさん．．．．．あなたも好きですね．．．．．

三人で住むには少し大きいような気もしたが、天道宮よりはましかと思うことにした。まあ、あつちは城だしな。それからそれぞれの部屋を決めて、俺は今外出するために玄関で靴を履いている。

「どちらへお出かけでありますか？」

『きょうせんとはつこく  
行先報告』

後ろから声が掛かって、振り返ってみると、ヴィルヘルミナが立っていた。

「ちょっと、そこら辺を散策にな。この町の地理も知っておきたいし」

俺は無難な答えを出す。

「では、私たちも一緒に」

『同伴申請』

ヴィルヘルミナとティアマトーが同行を申し出る。……しかし。

「大丈夫だよ。そんなに遠くには行かないし、そんなに遅くならな  
い内に帰ってくるから」

そう言ってヴィルヘルミナ達の申し出を断る。

「しかし……」

ヴィルヘルミナは顔を顰める。心配してくれるのは嬉しいが、今回はある目的のために一人のほうが都合が良いのだ。

「平気だって、アラストールやマルコシアスも一緒だし」

「………わかったのであります」

『了承』

ヴィルヘルミナは少し考えるそぶりを見せた後ティアマトーも一緒に承諾してくれた。

「それでは、私たちは美味しい夕飯を作って待っているのです  
す」

『晚餐期待』

「わかった。それじゃあヴィルヘルミナ、いつてきます」

『では行ってくる。留守を頼むぞ、万条の仕手』

『ま、なにかあったらすぐに念話で知らせるからよ。んじゃ、行っ  
てくるぜ』

俺たちはそれぞれに返事をする。

「行ってらっしゃいなのであります」

『帰宅待望』

ヴィルヘルミナ達の見送りを受けて、俺たちは家を出た。

家を出てから一時間くらい経って、家の近所の大方の地理を把握  
し終えた俺は今町をぶらぶらと歩いている。

（近所の地理は大体分かったし、そろそろ本来の目的に移るか）



そう思つて俺は公園を探した。何故かというところ恐らくそこに俺の目的である人物がいるはずだからだ。しばらく歩いてようやく小さな公園を見つけた。俺はそこに入ってあたりを見回す。そして俺の目にあるものが留まった。それは、ブランコに乗っているどこか寂しげな雰囲気を漂わせている今の俺と同年ぐらいの少女だった。

「……見つけた」

俺は遠目からその少女をじいつと見つめる。栗色の髪を短いツインテールにしている、可愛い顔立ちに暗い表情を浮かべている。

原作開始時よりも幼いが間違いない。彼女こそ将来、管理局の白い悪魔、魔王の異名で恐れられることになる少女。原作の主人公高町なのはである。

「アラストール、マルコシアス、あそこのブランコに乗ってる女の子、見えるか？」

『む？……うむ、見えるが？』

『あの嬢ちゃんがどうかしたのか？』

「彼女が原作の主人公、高町なのはだ」

俺は二人になのはのことを教える。

『ほう、あの子が……』

『へえ、そうなのか。しかしあの嬢ちゃん、なんか妙に暗くねえか？』

「この頃、なのは家でちょっとしたトラブルがあつてな、多分それが原因だろう」

なのはの家の事情を掻い摘んで説明する。

『なるほどな。お前の外出の本当の目的は彼女か』

「ああ、まあな。でもこんな簡単に会えるとは思ってなかったよ」

『はっは〜ん、そうかい。・・・で？どうすんだ？我が慈悲深きお人好し、神薙燎？』

「・・・・・・・・決まってるだろ」

マルコシアスの問いかけに俺は薄く笑いを浮かべてなのはに近づく。

「ねえ、どうしたの？」

なのはに出来るだけ優しく話しかける。

「ふえ・・・・・・・・？」

なのはは可愛らしい声を出して、顔を上げてこちらを見る。・・・・・・あかん、マジで可愛ええわ、この子。お持ち帰りしたい・・・・・・・・つと、いかんいかん。思わず、某鈍女のようなことを思ってしまった。

「えっと・・・・・・・・あなたはだれ？」

なのはが少し泣きそうな声で聞いてくる。

「俺は燎、神薙燎っていうんだ。君の名前はなんていうの？」

「な、なのは。たかまちなのはなの」

「なのは……いいね、可愛い名前だ」

俺はそう言つてなのはに笑顔を向ける。

「ふえっ！？／＼／」

ん？……なんだかなのはの顔が赤いけど、どうしたんだろう？

「じゃあ、なのはって呼んでもいいかな？俺のこと燎でいいから」

「えっと……りょう……ちゃん……？」

「え？……りょうちゃん？」

「うん。りょうちゃん」

りょうちゃん、りょうちゃんね。これは間違いなく勘違いしてるな。

（くっ、くっ。りょうちゃん、りょうちゃんか……くっくっ）

（ぶっ、ぶははっ、りょ、りょうちゃんって、おまつ、や、やべっ……し、死ぬ。ぶぶっ）

・・・なんだろう、なぜか無性にこのデバイスどもにこの世界でお馴染みの O H A N A S H I をしたくなってきたのだが。まあ、今はそれよりもなのはの誤解を解くのが先だな。

「えーっと、なのは？勘違いしてるみたいだから言っとくけど、俺は男だから」

「ふえっ！？そ、そうなの？ご、ごめんね。だってすごく可愛い顔してるから」

ぐはっ！・・・け、けっこつきついもんだな。可愛いって言われるのって・・・。

「う、うん。大丈夫。気にしてないから。女顔だって自覚あるし・・・」

なんせ、シャナの顔だもんな。無理もないか。

「それで、なのははなんでさっき寂しそうな顔してたの？」

気を取り直して俺はなのはに質問する。

「えっ？そ、そんなことないよ。なのは、べつにさびしくなんて・・・」

「そんな顔で言われても説得力ないよ。なあ、なのは。俺でなければ話してみるよ。何ができるかわからないけど、話を聞くぐらいなら出来るから」

本当は知っているが、俺は敢えてなのは聞くことにする。彼女の心の闇をほんの少しでも理解するために。なのはしばらく俯いていたが、やがてぼつりぼつりと話し始めた。

「あのね、なのはのお父さんがね、じこにあつてね、おおけがしちやつたの。それでね、お父さんがよくなるまでお店をがんばらなきゃならないの。それで、お母さんとお姉ちゃんはすごく忙しそうでお兄ちゃんはなんだか毎日怖い顔してるの。みんな、誰もなのはのこと見てくれないの．．．ひつく、だれも、なのはのこと．．．うつく．．．かまってくれないの．．．でも、いま、みんなすごく忙しいから．．．ひくつ．．．わがままいっちゃ．．．いけないの．．．ひつ．．．がまんしなくちゃ、いけないの．．．うつく．．．がまんして、いいこでいなくちゃ．．．いけないの。いいこでいなくちゃ．．．だめなの．．．だって、めいわくかけたら．．．ひつく．．．みんななのはのこと．．．きらいに．．．なつちやうから。そしたらなのは．．．ひとりぼっちになつちやうから．．．だから．．．うつ、うええ」

．．．．．ああ、やつぱりこのときのトラウマがなのはの生き方を決めたんだ。誰にも迷惑を掛けたくない。迷惑を掛けて、嫌われて、独りぼっちになりたくない。だから、体の限界なんて考えずにあんなにボロボロになるまで無茶をし続けたのか。その気持ちはわからなくはない。でもそれじゃあ、あまりにも．．．あまりにも．．．。

「なのは．．．．」

フワッ

「ふえっ？」

ギュッ

気が付くと俺はなのはを抱き締めていた。

「り、りょうくん……?」

「……しなくていい」

「え……?」

「がまんなんてしないでいい」

俺は囁くように訴えかける。この馬鹿みたいに優しく不器用な少女の心に俺の気持ちが届くように。

「で、でも……」

「無理して、我慢して、良い子でいることなんてないんだ。辛いんなら辛いつて言っればいいんだ。苦しいなら苦しいつて言ってもいいんだ。誰もそんなことではなのはこのこと嫌ったりなんてしないから」

「りょうくん……」

「なあ、なのは。言葉ってなんのためにあるのか知ってるか?」

「え……?」

「それはな、伝え合うためだ。自分の想いや気持ちをちゃんと言葉にして相手の心に届けるためだ。言葉だけじゃ伝わらないこともある

だろう。でも言葉にしなきゃ伝わらないことだって確かにあるんだ」

言葉にせず気持ちのすべてを伝えられるならどんなにいいか。でも人はそんなに器用じゃない。そんなことができる人間なんて滅多にいないだろう。だから言葉が必要なんだ。伝えたい想いを、知ってほしい気持ちをちゃんと相手に届けるために。

「なのは、言いたいことがあるならちゃんと言うんだ。言いたい言葉や気持ちを無理に押し詰め続けるといつか心が壊れてしまう。伝えたい言葉を相手に伝えることは全ての人間が持つ権利だ。誰もそれを責めることはできない」

「・・・うん」

「だからなのは、お前も我慢なんかするな。言いたい言葉を、自分の家族に伝えるんだ。大丈夫、きつとお前の家族は聞いてくれる。お前が家族を好きなと同じくらいお前の家族もお前のことが大好きなはずなんだから」

「うん、うん」

「それとな、なのは、自分ひとりじゃできないことがあったら誰かを頼れ。お前は一人で頑張りすぎだ」

「そ、そうかな？」

「そうだ。誰にも頼らないってのは強いってことじゃない。それはただ誰かを信じるのが、誰かの手を掴むのが怖いだけだ」

「うん。・・・あ、あのねりょうくん、お願いがあるんだけど・

・いいかな？」

「お願い？・・・ああ、いいぜ。言ってみろよ」

「あのね、いまだけ、思いつきり泣いてもいい？それでなのは泣き止むまで抱き締めててくれる？」

これは・・・俺の言葉を受け入れてくれたということの良いんだろうか。

「当たり前だろ。思いつきり泣けばいい。俺はお前が泣き止むまでこうしててやる。だって、俺たちはもう・・・友達なんだから」

この言葉を皮切りになのはの目から涙が溢れ出てきた。

「うっ、うわああああん！！さっ、さびかったよおっ！！くるしかったよおっ！！ずっと、さびしくて、くるしくて、つらくて、なきたくて、でも、だれにもいえなくて！！ひっ、ひっく。うえ、うえええん！！！」

抱きついて俺の胸で泣きじゃくるのはを俺は優しく抱き締め続けた。彼女が今まで心の奥に溜め込んでいたものを全て吐き出して心から笑えることを願いながら。

この日、少女を縛り続けていた孤独という名の鎖は全て砕かれた。一人の心優しき少年の想いという名の剣によって。



## 第七話 孤独の少女に救いの手を（後書き）

さて、いかがでしたでしょうか？

私としても今回ののはかなりの自信作なのですが。

では感想や意見などいつでもお待ちしております。

また次回お会いしましょう。

## 第八話 炎髪灼眼と白い魔王（前書き）

どうもロキです。時間ができたので、更新させてもらいました。

なのはの心を孤独から救った燎、さて彼の次の目的は・・・？

それでは、第八話始まります。

## 第八話 炎髪灼眼と白い魔王

S i d eなのは

わたしのなまえは、たかまちなのはといいます。今わたしのいえはともたいへんです。お父さんがじこにあつて、おおけがをしてしまいました。お母さんとお姉ちゃんはお父さんがよくなるまでお店をがんばらないといけません。お兄ちゃんはなんだかいつも怖い顔をして剣をふっています。

みんな、なのはのことをみてくれません。なのはは毎日ひとりぼっちでさびしいです。でもがまんしないといけません。わがママを言つてみんなをこまらせたくないから。だからわたしはひとりぼっちでもがまんしていい子でいないといけません。わがママをいったら、きつとみんななのはのこときらいになっちゃうから。・・・でも、やつぱりひとりぼっちはさびしいです。なきたいです。でもないちゃだめです。なのははいい子でいないといけないんです。・・・でも・・・でも。

そんなときでした。

「ねえ、どうかしたの？」

「ふえ？」

とつぜん、こえを掛けられました。見上げてみると、きれいな黒いかみをした、とても可愛い女の子が立っていました。

「えっと……あなたはだれ？」

わたしは誰なのかきました。

「俺は燎、神薙燎っていうんだ。君の名前はなんていうの？」

おんなのこは、そう答えました。でも女の子なのにおれってちょっとおかしいです。

「な、なのは。たかまちなのはなの」

わたしは自分のなまえを言いました。

「なのは……いいね、可愛い名前だ」

そう言ってその子はわたしに笑いかけました。

「ふえっ！？／＼／」

わたしは思わずドキツとしてしまいました。だってその子の笑顔はとてもきれいで、かわいくて、そしてとても、やさしい笑顔だったから。

「じゃあ、なのはって呼んでもいいかな？俺のこと燎でいいから  
そう言われたので、わたしはなまえを呼んでみました。

「えっと……りょう……ちゃん……？」

「え？……りょうちゃん？」

わたしがそう呼ぶとりょうちゃんは目をパチクリさせました。・  
・あれ？なにかいけなかったかな？

「うん。りょうちゃん」

わたしはもういちど、りょうちゃんのなまえを呼びました。

「えーっと、なのは？勘違いしてるみたいだから言っとくけど、俺は男だから」

「ふえっ！？そ、そうなの？ご、ごめんね。だってすごく可愛い顔してるから」

びつくりしました。なんとりょうちゃん・・・いえりょうくんは、男の子だったのです。あんまり可愛い顔してるから女の子かと思っしまいました。わたしはりょうくんにあやまりました。りょうくんは気にしてないと言ってくれました。

「それで、なのはなんでさっき寂しそうな顔してたの？」

りょうくんはふいにそう聞いてきました。

「えっ？そ、そんなことないよ。なのは、べつにさびしくなんて・・・」

りょうくんにそう聞かれてわたしはさっき泣きそうになってたのを見られたと思って慌ててわらってこたえました。

「そんな顔で言われても説得力ないよ。なあ、なのは。俺でよけれ

ば話してみろよ。何ができるかわからないけど、話を聞くぐらいなら出来るから」

そう言われて、わたしは話していいのかまよってしまいました。でもわたしは不思議と、りょうくんになら話してもいいんじゃないかと思いました。そう思うとわたしはいつのまにかりょうくんにいえのことを話しはじめていました。でも話しているうちにだんだんとかなくなってきた、なきそうになってしまいました。

すると、りょうくんが・・・

「なのは・・・」

フワッ

「ふえっ？」

ギョッ

なのはのことをだきしめてくれました。りょうくんのからだは、あたたかくて、なんだかすごくあんしんします。それにとってもいいにおいがします。やさしいお日さまみたいなにおい。

「り、りょうくん・・・？」

あんまりいきなりだったから、なのはがびっくりしていると。

「・・・しなくていい」

「え・・・？」

「がまんなんてしなくていい」

そうりょうくんはいいました。

それからりょうくんは、たくさんのことをなのおしえてくれました。がまんなんてしなくていい、いい子でいなくてもいい、言いたいことがあるのならちゃんと言う、ひとりでがんばらないで、こまったときはだれかにたよる、それはけっしてわるいことじゃない。りょうくんのことを聞いているとずっとくるしかったのはのむねのおくがあったかくなっていくような気がしました。

わたしはもうがまんができなくなってきた、りょうくんにないているあいだけだきしめていてほしいとおねがいするとりょうくんは……

「当たり前だろ。思いっきり泣けばいい。俺はお前が泣き止むまでこうしてやる。だって、俺たちはもう……友達なんだから」

そのことをきいて、すごくうれしくなってわたしはもうげんかでした。いままでむねのおくにおしこめていたものを、ぜんぶはきだすようにわたしはりょうくにだきついておおごえでなきました。

りょうくんは、わたしが泣き止むまでずっとやさしくだきしめていてくれました。

S i d e   E n d

S i d e   燎

なのはがようやく泣き止んで俺たちは今、公園のベンチに座っている。かなりの時間なのは泣いていた。ずいぶんと長い間溜め込んでいたのだろう。これで少しはなのはの心を軽くできればいいのだが。

「あ、あのね、りょうくん。ごめんね、なんだかいっぱい泣いちゃって」

隣に座っているなのはが謝ってきた。

「謝らなくていい。言っただろ？泣きたいときは思いっきり泣けばいいって。それでなのはの気が晴れたのなら、俺は満足だよ」

俺はそう言っただけなのに笑いかける。

「う、うん。ありがとね、りょうくん／＼／＼」

なんだかなのはの顔がまた赤いのだが、風邪でも引いたのか？

（……………なあ、アラストールよお、これってよ……………）

（……………うむ。間違いないだろうな。まったく、随分と罪作りなことだ）

（つつか、燎のやつ、ぜってー気づいてねえよな？）

（どうやらそのようだな。やれやれ、我らが主は些か以上に鈍感なようだ。どこぞのミステスを思い出す）



「……なんかすごく失礼なことを言われたような気がする  
のはなんでだ？」

「りょうくん、本当にありがとね。わたしすごくうれしかった。が  
まんしなくていいって言ってくれて、泣いてもいいって言ってくれ  
て、それから……友達だって言ってくれて……」

なのはは笑いながらそんなことを言ってくる。むう、俺としては  
そんなに大したことをしたつもりはないのだが……。改めて言わ  
れると、なんだか恥ずかしいな……。

「気にするなよ。俺たちが友達なのは本当だろう？俺たちはもうお  
互いに名前を呼んでるんだから」

「なまえを呼べば友達なの？」

「そうだよ。いいか、なのは？友達を作るときに一番大切なことは  
な、まず名前を呼ぶことだ。名前を知らなきゃ友達になてなれな  
いからな。だからまず、名前を呼ぶんだ。君とかあなたとかじゃな  
く、相手の目を見てな。それが友達になるための第一歩だ。名前を  
呼ぶこと、全部まずはそこからなんだ」

「なまえをよぶこと……うん！わかった！」

なのはは弾けるような笑顔で答えた。ああ、これだ。俺が見たか  
ったのはこの笑顔なんだ。俺はこの笑顔を守るためにこの世界に來  
たんだ。と俺は改めて自分の気持ちを確認した。

それにしても、こんな優しい子にこんなに寂しい思いをさせるな  
んで、共弥のやつはなにをやってるんだ。こんなときこそ長男が家

族を支えなきゃいけないんだろ。これは少し O H A N A  
S H I をする必要があるな。

「りょうくん？どうかしたの？」

と、なのはが聞いてきた。おっと、いかんいかん。つい考え込んでいたようだ。

「いや、なんでもないよ。大丈夫」

俺はあたりさわりのないように答えた。

「さてと、いつまでも座っててもつまらないし、遊ぼうか、なのは？」

「うん！遊ぼうりょうくん！！」

俺の誘いに嬉しそうに答えるなのは。

「それじゃあ、なにして遊ぼうか？」

「なのは、おにごっこがしたいの！」

「鬼ごっこね、じゃあなのはが鬼な！」

そう言った瞬間、俺は走って逃げだした。

「にゃあ！？り、りょうくんずるいよ。まって〜！」

不満を言いながらもどこか楽しそうに俺を追いかけるなのは。俺

たちの鬼ごっこが始まった。

（なのはもう大丈夫そうだな。さて次は………土郎さんだ）

俺はなのはから逃げ回りながら、次の目的を定める。

## 第八話 炎髪灼眼と白い魔王（後書き）

さて、いかがでしたでしょうか？

次回は士郎の治療とスコンとの対決です。ついに燎のチートの一端が垣間見れるかもしれません。

それでは感想や意見などお待ちしております。

次回をお楽しみに。

## 第九話 治療（前書き）

申し訳ございません。シスコンとのバトルを書くつもりだったのですが。

楽しみにしていただいた方々、本当に申し訳ございません。

次回こそ本当にVSシスコンです。

## 第九話 治療

S i d e 療

あの後、俺はなのはと鬼ごっこをしたり、かくれんぼをしたりと思いつきり遊んだ。なんだか前世の子供の時よりも遊んだような気がする。ちなみに遊んでいる時になのはが四、五回ほど転んだ。幸い怪我はしなかったが、どうやら運動神経が切れてるというのは本当のようだ。

まあ、そんな感じで俺たちは二、三時間ぐらい遊びまわった。なのはも楽しんでくれたようで何よりだ。しかし、流石になのはは疲れてきたようだ。俺のほうはそんなに問題ないのだが。ま、ここら辺で今日はお開きにするか。

「なのは、今日はもうここまでにしよう」

俺はなのはに終わりにするように言う。

「えゝ？でも」

どうやらなのはは不満そうだ。いや、二時間以上も遊んでまだ足りないんかい、この子は。

「だゝめ。あんまり遊びすぎると疲れて動けなくなっちゃうだろ。今日はもう終わり。いいな？」

なのはの頭を撫でながら優しく言う。

「うっ、はい」

返事はしたが、なのはは心底残念そうだ。

「大丈夫だよ、そんな顔しなくても。また一緒に遊ぼう」

俺はまた一緒に遊ぶ約束をする。

「ほんと!？」

俺の言葉を聞いてなのはは花の咲くように笑う。

「ああ、ホントだ。約束な。ほら、指切り」

俺は小指を突き出す。

「うん!！」

なのはは嬉しそうに俺の小指に自分の小指を絡める。・・・そして一緒に歌う。

「ゆびきり」

「げんまん」

「うそついたら」

「はりせんぼん」

「のゝます」

「「ゆゝびきつた」」

歌い終わると俺たちは小指を離す。

「約束だからね。りょうくん」

「ああ、わかってるよ」

「えへへ」

本当に嬉しそうだな。やっぱりなのはには笑顔が一番似合うな。

まあ、それは他の子達も同じかな。さてと、そろそろ……

「なあ、なのは。なのはのお父さんが入院してる病院ってどこだか分かるか？」

俺は次の目的、土郎さんの治療をするためになのはに土郎さんの居る病院を訊いた。

「ふえっ？う、うん知ってるけど、どうして？」

なのはは不思議そうに訊いてくる。

「いや、なんか心配でさ、お見舞いに行こうかと思って」

「おみまい？」

「ああ、なのはも一緒に行こうぜ。一緒に行って、なのはの元気を



分けてあげればなのはのお父さんもきっとすぐ良くなるよ」

「ほ、ほんと!?!」

なのはの問いに笑顔で答える。

「ああ、本当だ。きっと良くなる。だから、一緒に行こう。なのは  
俺はなのはに手を差し出す。

「うん! いこう、りょうくん!」

なのはは俺の手を握り、引っ張って走り出した。

「お父さんの病院は、こっちな!」

「ああ!」

なのはに案内されて俺達は土郎さんのいる病院へと向かった。

「ここが、お父さんのいる病院なの」

「……ここが」

俺はなのはに案内されて、やってきた病院を見上げた。けっこう大きな病院だ。

（ここに、士郎さんが……）

俺たちは病院に入って、看護婦さんに士郎さんの病室を訊いて、向かった。

三階まで上がって一つのドアの前で止まった。横のプレートに、『高町士郎』と書かれていた。

「ここが、お父さんの病室」

俺はドアを開けた。中には全身を包帯で巻かれた、見るからに重傷な男の人がベッドで横になっていた。この人が、なのはの父親の高町士郎さんか。

「お父さん……」

なのはは士郎さんに近づく。

「お父さん、なのはは元気だよ。お母さんも、お姉ちゃんも、お兄ちゃんもみんな元気だから、でもみんなお父さんのこと心配してるよ……」

なのははそつと士郎さんに囁くように言う。

「はやく、元気になってね。なのはの元気、いっぱい分けてあげる

から。だから・・・はやく・・・元気に・・・なつて・・・  
・お父さん・・・」

とても辛そうなのはの声。それでも涙を堪えて言葉を紡ぐ。自分の祈りが父親に届くことを祈って。

「なのは、俺もなのはのお父さんに挨拶したいから、ちょっと外で待っててくれるか？」

なのはの肩に手を置いて外で待つように伝える。

「グスツ・・・うん」

服の袖で涙を拭いてなのはは外に出てドアを閉める。

俺はなのはが外に出たことを確認すると、この病室の中に防音用の結界を張る。

「さて、これでよし」

俺は士郎さんに近づく。

「初めまして、士郎さん。俺は神薙療、なのはの友達です。あなたを助けに来ました」

そう言つて、士郎さんに手を翳す。

「<sup>クワイ</sup>治癒」

俺の翳したてから柔らかな光が溢れ出て士郎さんの全身を覆う。

俺が使った魔法はネギまの魔法の初步の回復呪文である。それでも俺が使えば個程度の傷数分で跡形も残さず治療できるのだが、あまり一気に治すと怪しまれるので意識が戻る程度に止めておく。

やがて、徐々に光が消えていく。そして士郎さんを覆っていた光が全て消えた。治療が終わったのだ。

「ふう。とりあえずこんなもんかな。どうだアラストール、マルコシアス？」

俺は治療の出来をアラストールとマルコシアスに訊く。

「ふむ、悪くはないな」

「まあ、初めてにしちゃあ上出来なほうだな」

二人から及第点が出る。

「そっか・・・良かった」

俺は安堵の息を吐いた。

「さて、治療も済んだし、そろそろ出るか」

「うむ、それがよからう」

「だな、あんまり遅えと嬢ちゃんが変に思っだらうしな」

結界を解いて、俺はドアを開ける。廊下でなのはが椅子に座って

待っていた。

「あ、りょうくん。もういいの？」

俺に気づいて近寄ってくる。

「ああ、まあな。さ、帰ろう？家まで送ってくよ」

俺はまたなのはにてを差し出す。

「うんっ！！」

なのはは笑顔で握り返す。

俺たちは来た時と同じように手を繋いで病院を後にした。

## 第九話 治療（後書き）

次回は必ずシスコンにO H A N A S H Iです。

楽しみにしててください。

何か感想や意見などありましたらいつでもお送りください。

ではまた次回お会いしましょう。

## 第十話 対決 御神の剣士（前書き）

さて、今回は高町家のシスコンとのバトルです。

戦闘描写が上手く書けたか不安がありますが、頑張ってみました。

では第十話始まります。

## 第十話 対決 御神の剣士

S i d e 燎

士郎さんの治療を終えた俺はなのはと手を繋いでなのはを家まで送っている途中である。俺は歩きながら士郎さんの負った怪我について考えていた。あんな重傷を負って生きているなんて流石は御神の剣士といったところか。それと治療しているときに思ったが、士郎さんほどの実力者がそんな簡単に事故にあうものだろうか？・・・まさか、誰かに命を狙われた？

あり得ないことじゃない。俺はとらハのことはよく知らないが、たしか士郎さんは桃子さんと結婚する前は要人のボディガードをしていたと聞いたことがある。もし命を狙われたのなら、やったのは間違いなく士郎さんに仕事の邪魔をされた連中だろう。そして士郎さんが死んでいない以上また士郎さんを襲う可能性がある。今度はなのはたちにまで危険が及ぶかもしれない。十分注意しておこう。さしあたり、なのはの家の周りに式神をいくつか放って見張らせておくか・・・。

「・・・くん。・・・りょうくん」

「・・・ん？」

「どつかしたの？」

なのはが俺の顔を覗き込んでくる。・・・ちょ、近い近い。



「いや、なんでもないよ。ちょっと考え事してただけ」

俺はそう言っただけなんでもない風に振る舞う。

「ふうん。・・・あ、りょうくん、あそこがなのはのお家なの！」

なのはは綺麗な看板のついたお店を指差す。その看板には【喫茶翠屋】と書かれていた。

（おお、ここが翠屋か。まさか生で拝める日がこようとは）

俺はりりなのの世界で有名な喫茶店翠屋に実際に来ることができてちょっと感動している。

「よかったらはいって、りょうくん。お母さんたちに紹介したいから」

なのはは俺にお店のなかに入るように促す。

「いいのか？」

「うん！」

俺の問いかけになのはは笑顔で肯定した。

「それじゃあ、お邪魔するか」

空いてるほうの手で俺はドアを開けてなのはと一緒に店のなかに入る。喫茶店だからかお店のなかからは甘くて良い匂いが漂ってきた。

「お邪魔しまーす」

「ただいまー」

店に入ると俺たちの声を聴いて、奥から女性が出てきた。

「はーい、ってあらなのは」

「お母さん！」

なのはは嬉しそうにその女性に抱き着く。・・・やっぱりか。

「ただいま。お母さん」

「おかえりなさい。なのは」

女性は優しく微笑んでなのはを受け止める。

この人がなのはの母親の高町桃子さんか。っていうか実際に見るとほんとに若いな。これで三人の子持ちって、ありえないだろ。なんだ、高町家はサイヤ人の血でも引いてるのか？・・・ありえそうで怖いな。

「ところでなのは、この子はどなた？」

桃子さんが俺のことを訊いてくる。

「りょうくんっていうの！なのはのお友達になってくれたの！」

なのは嬉しそうに俺を紹介する。

「初めまして、神薙燎です。なのはちゃんの友達になりました」

俺も自己紹介をする。

「そうなの。ありがとうね、りょうくん。ちゃんとご挨拶できて偉いわね」

桃子さんは優しい笑みを浮かべて俺の頭を撫でる。……むう、これは完全に子ども扱いされてるな。まあ、今の俺の外見じゃあ仕方ないか。

「でもなのは、女の子なのにりょうくんはちょっと変じゃない？」

と桃子さんはなのはの俺の呼び方を指摘する。……って桃子さん！あなたもですか！？

「あ、あのねお母さん。りょうくんはね、男の子なの……」

なのはが桃子さんの誤解を解く。

「え……そうなの？」

驚いた顔で俺を見て、なのはに訊く桃子さん。

「そうなの」

頷くなのは。

「あ、あらやだ、私ったら・・・ごめんなさいね、りょうくん」

慌てて謝る桃子さん。・・・いや、別にいいんだけどね。もう諦めたし。

「いえ、いいんです。女顔って自覚ありますから。なのはにも間違わられたし・・・」

そう言っただけなのはジト目で見る俺。

「うっ・・・」

俺の視線を受けてなのはサッと目を逸らす。

「そ、そう・・・あつ、そうだわ！ねえ、りょうくん。よかったらケーキでも食べていかない？」

唐突に桃子さんが言うてくる。

「えっ？でも俺、お金持ってないし」

そう、今の俺には手持ちの金が一銭もない。上手いと評判の翠屋のケーキは是非とも食べてみたいが、払う金が無いのではどうしようもない。

「いいのよ、お金なんて。なのはと仲良くしてくれたお礼に・・・ね」

そう言っただけにウィンクする桃子さん。・・・美人はなにをやっても様になるな・・・と俺は思わず感心してしまう。つか

この人ホントに綺麗だよな。ちょっとドキツとしたぞ。こんな人と  
ゴールインするなんて、士郎さんもやるな。

「いいんですか？」

「もちろん」

桃子さんは笑いながら言ってくれた。ほんとにいい人だ。

うーん、ここまで言ってくれて断るのは逆に失礼ってものかな？  
それに翠屋のケーキをタダで食える機会なんてそうそう無いだろう。  
このチャンスを逃す手は……ないな。

「それじゃあせつかくですから、お言葉に甘え」  
「なのは！」  
「……ん？」

俺が答えようとすると俺の言葉を遮ってなのはを呼ぶ声が聞こえた。  
声のしたほうを向いてみると、そこには十五、六歳くらいの顔  
つきが士郎さんに似ている青年が立っていた。

「あ、恭弥お兄ちゃん……」

「あら、恭弥」

なのはと桃子さんが青年の名前を呼ぶ。

恭弥……そうか、こいつがシスコンで有名な、なのはの兄貴  
の高町恭弥か。たしかこいつも御神の剣士なんだっけ？

「なのは、いったいどこに行ってたんだ！心配したんだぞ！」

出てくるなりなのはに怒鳴る恭弥。

「ご、ごめんなさいお兄ちゃん」

暗い表情で謝るなのは。．．．．．まったく、もう少し言い方つても  
があるだろうが。大体心配だど？どの口が言いやがる。そんなこ  
と言う資格がお前に．．．．．。

「まったく、反省しろ。この忙しいときに皆に迷惑を掛けるんじゃない  
おい、ちょっと待て」．．．．．？」

おい、いまこいつなんて言った？．．．．．迷惑？なのはが迷惑を  
掛けたって言ったのか？．．．．．ふざけんな。今までなのはがど  
んな気持ちでいたと思ってるんだ。誰にも迷惑を掛けたくなくてい  
い子でいようと我慢して独りぼっちで泣いていたなのはの苦しみが  
分かるのか。なのはのことは見ようとしてもしていなかったお前に。

「なんだ．．．．．君は？」

恭弥はやつと俺に気づいたように言う。

「俺は神薙療、なのはの友達だよ。一つ訊くけど、あんたがなのは  
をずっと独りぼっちにしてるお兄さん？」

俺は挑発的に訊く。

「なに？」

恭弥の目つきが陰しくなる。だがその程度で怯む俺じゃない。

「聞こえなかったのか？あんたが自分の妹の面倒一つ見られない駄目兄貴かって訊いてるんだよ」

俺はさらに恭弥を挑発する。

「なっ、なんだと！」

恭弥は案の定俺の挑発に乗ってきた。

「さっきから聞いていれば勝手なことばかり抜かしやがって、ずつとなのはをほつたらかしにしておいてこんな時だけ兄貴面か、ここまできると呆れを通り越して感心するよ。まったく大したものだ」

「き、貴様っ！」

すごい形相で俺を睨み付ける恭弥。

「り、りょうくん」

なのはが俺を心配して声を掛けてくる。桃子さんもハラハラした様子でこちらを見ている。

「今のあんたになのはを叱る資格があんのか？この子を叱るなら、一つでも兄貴らしいことをしてから叱りやがれ！妹の面倒一つまともに見られない奴が偉そうなこと言ってるじゃねえ！！」

俺は腹の底から叫ぶ。ここまで頭に來たのは久しぶりだ。

「だ、黙れ！お前に何が分かる！！」

叫び返す恭弥。

「わかんねえよ！自分のやるべきことをはき違えて家族をほったらかしにしてる奴の気持ちなんて分かりたくもねえ！！」

ああ、そうだ。こいつは自分のやるべきことをはき違えてる。こいつが今やらなければならないことはこんなことじゃない。

「いいだろう。道場に来い！その減らず口、黙らせてやる！！」

そう言って店の奥に歩いていく恭弥。

「恭弥、待ちなさい！」

桃子さんが止めようとするがどうやら聞こえていないようだ。

「大丈夫ですよ桃子さん。ちょっと行ってきます」

俺は安心させるように言って店の奥に向かう。ちょうど良いあいつの目を覚ましてやるとするか。

「あ、待つてりょうくん。なのはもいくの」

心配なのか俺についてくるなのは。

「ああ、ありがとう」

俺はなのはお礼を言う。



なのは案内されて道場に着くと恭弥が二本の木刀を持って待っていた。

「よく逃げずに来たな」

「逃げる？なんでお前如きに逃げる必要がある」

恭弥の挑発に挑発で返す。

「覚悟しろ。二度とそんな口が利けないようにしてやる」

二本の木刀を構える恭弥。その構えからかなりの腕であることがわかる。

どうやらこの様子じゃ、完全に頭にきてるようだ。だが、それはこっちも同じなんだよ。

（こんなにも容易く相手の挑発に乗せられるとはな、腕のほうはともかく、精神面は些か以上に未熟なようだ）

（ありゃあ完全に頭に血が上ってんな。これじゃあ、どっちが子供だかわかりやしねえぜ）

アラスツールとマルコシアスが辛辣な評価を下す。

（まったくだな。しかし、だからと言って手加減する気はないがな）

（うむ。当然だ）

（おうよ、やっちまいな。我が鋼鉄の拳骨、神薙療！！」

「行くぞ!!」

「来やがれ!!」

俺と恭弥の決闘が始まった。

恭弥は凄まじいスピードで踏み込んできて、上から剣を振り下ろす。しかし俺はこれを軽く横にずれて躲す。

「なっ!?!」

驚く恭弥。どうやら今の一撃で決めるつもりだったようだ。俺を嘗めていたな。

「どうした?何を驚いているんだ?」

「く、くそっ」

またさらに踏み込んできて剣を振るう恭弥。今度は横薙ぎに振るうが俺はそれも躲す。しかし今度は恭弥も引かずにさらに打ち込んでくる。

右薙ぎ、左薙ぎ、袈裟切り、逆袈裟、切り上げ、唐竹割りと次々に両方の木刀を操り剣撃を繰り返してくるが一つとして俺にかすりもしない。俺は恭弥の剣撃全てを完全に見切り躲しているのだ。

「くそっ、なぜだ!?!なぜ当たらない!?!」

自分の技を悉く躲される恭弥。その顔は驚愕に彩られている。

「なぜ当たらないかって、それは簡単だよ。お前の剣は確かに速いが、動きが単純なんだよ」

そう、恭弥の剣は確かに速いが、それだけだ。頭に血が上っているせいで動きが勢いに任せすぎていて実に読みやすい。俺は振り下ろされてくる剣を片手で掴んだ。

「な！？く、くそつ、放せ！」

恭弥は俺から剣を引き剥がそうとするが、魔力で身体強化をしている俺の手はびくともしない。

「………こんなもんかよ」

「なに？」

「こんな程度の力のために、お前はなのはを傷つけたのか？」

「なっ」

「ふざけんな！！」

ドゴォー！！

「ぐはっ！」

俺は恭弥の横っ面を思いっきり殴り飛ばした。あまりの威力に木刀を手から放して吹っ飛ぶ恭弥。

「おい恭弥、なんで士郎さんがお前に剣術を教えたと思う？」

「なに・・・？」

俺は恭弥に問い掛ける。立ち上がりながら訝しげに俺を見る恭弥。

「どうして士郎さんは、お前に剣術を教えたんだ？」

俺は足を魔力で強化して軽く瞬動を使い恭弥に肉薄する。

「なっ！？」

目を見開く恭弥の腹にボディীবローを叩き込む。

ドガッ！！

「くふっ！」

「こんなことをさせるためか？お前に自分の仇を打ってもらっためか？」

さらに二、三発続けて打ち込む。

ドグッ！！ガスッ！！

「あがつ！ごはっ！！」

拳を打ち込むたびに恭弥の顔が苦悶に歪む。

「違うだろ。そうじゃねえだろっ！！」

叫ぶと同時にアッパーを放ち、顎を打ち上げる。

ズガンッ！！

「がはあっ！！」

恭弥の体が跳ね上がるが、俺は服の襟を掴んで逃げられないようにする。

「お前に強くなってほしかったのは、お前に……家族を護って欲しかったからだろ！！」

俺はまたさらに恭弥を殴る。何度も何度も殴り続ける。拳に意思を込めて殴る。俺の想いがこいつの心に届くように、土郎さんの気持ちが伝わるように。

「自分になにかあったときのために、自分に代わってなのは達を護って欲しかったからだろ。お前ならきつと守ってくれるって信じてたからだろ！それなのにお前はなにをやってんだよ！！」

ドガッ！！ゴスッ！！

「うがっ！！ぐふっ！！」

「なのはをほつたらかしにして、怖がらせて、それが兄貴のやることかよ！！」

ドグウッ！！！！

「ぐはあっ！――！」

俺は一際強く拳を腹に叩き込む。こいつのひん曲がった根性を叩き直すように。

「恭弥、兄貴つてのがどうして一番最初に生まれてくるか知ってるか？」

俺は一度殴るのをやめる。

「え……？」

「それはな、後から生まれてくる弟や妹を護るためだ」

「――！」

「その兄貴が、自分の妹を苦しめてんじゃねえっ――！」

「……………」

「お前の父親に比べればどうってことねえだろうがな」

俺は拳を思いっきり振りかぶる。

「少しでもお前の目を覚まさせてやる。自分のやるべきことがなんなのか、もう一度よく考えやがれ！この馬鹿野郎――！」

ドコア――！！――！！

「ぐふあああ――！！――！」

止めの一発を顔面に叩き込んだ。恭弥は吹っ飛んでそのまま壁に激突して、そのままずり落ちると気絶したのか動かなくなった。

こうして俺と恭弥の対決は終わった。

## 第十話 対決 御神の剣士（後書き）

いかがでしたでしょうか？お楽しみいただけたのならよかったです。

それでは今回はこの辺で。皆様からのご意見、ご感想お待ちしております。

ではまた次回お会いしましょう。

なるべくはやく無印編に入れるように頑張ります。

それでは！！



## 第十一話 これからのこと（前書き）

時間ができたので更新しました。

次の次あたりから無印編に入っていきたいと思います。

では第十一話始まります。

## 第十一話 これからのこと

S i d e 燎

恭也との戦いが決着して、俺は今翠屋で桃子さんお手製のショートケーキを食べている。ちなみに恭弥はあの後帰ってきた美由希さんが部屋に運んで行った。

「いや、ほんと美味しい。これなら商売繁盛間違いなしですよ。桃子さん」

俺は出されたケーキをパクパク食べながらケーキの味を称賛した。いや、まじで美味いんだってこれ。

「そういつてくれると嬉しいわ。遠慮しないでいいからどんどん食べて頂戴ね？」

笑顔で言う桃子さん。

「はい！あ、紅茶のお代わりください」

と、紅茶のお代わりを頼む俺。

「はい。美由希、お願い」

美由希さんと呼ぶ桃子さん。

「はい、紅茶ね」

返事が返ってきて、奥から女性が出てきた。眼鏡に髪を三つ編みにした女性だ。そうこの人が、なのはのお姉さんの高町美由希さんだ。

「はいどうぞ、燎くん」

俺のところまで来て、カップに紅茶を注いでくれる美由希さん。

「ありがとうございます、美由希さん」

美由希さんにお礼を言う。

「うん。でも、ほんとにすごいよね、燎くん。まさか恭ちゃんに勝っちゃうなんて」

笑いながら自分の兄を負かした俺を称賛する美由希さん。

「うん！りょうくんすごく強かったの！！」

嬉しそうにそう言うのは、俺の前で同じようにケーキを食べるなのは。

「でも燎くん、ほんとにごめんなさいね。うちの恭也が……」

桃子さんが申し訳なさそうに言ってくる。

「いえ、平気です。俺のほうも少しやりすぎちゃったと思うし」

ま、確かにすこしやりすぎであったとは思う。いくら頭に血が上

つてたとはいえ気絶するまでする必要はなかった。

「いいのよ。気にしないで。子供相手にむきになった恭也が悪いんだから」

「そうだよ。それにこここのところ、恭ちゃんちょっとやりすぎてたから、いい薬だよ」

二人は気遣うように言ってくれる。そう言ってくれると少し気分も軽くなる。

「それにしてもなのは、燎くんってそんなにすごかったの？」

と、ふいに美由希さんにはなのはに訊く。

「うん！りょうくんすごかったの！！お兄ちゃんの剣片手で受け止めちゃったんだよ」

嬉々として俺と恭也の勝負を語るなのは。

「へえ、すごいねえ。あたしでも未だに恭ちゃんの剣は中々見切れないのに」

感心したように言う美由希さん。

「いえ、たまたまですよ。それにあの時の恭也さんの動きはすごく単純でしたから。あれなら美由希さんも見切れますよ」

そう、実際あの時の恭也は怒りに身を任せすぎていた。怒りは確かに普段以上の力を与えてくれるがそれに溺れてしまうのは三流の

することだ。もし恭也が怒りを制御して挑んできていたら正直危なかったと思う。

「それでもすごいよ。燎くんってなにか格闘技でも習ってるの？」

興味深げに訊いてくる美由希さん。

「ええ、まあ・・・そんなとこです」

俺は言葉を濁す。正直に言えば俺には格闘技の心得などない。そんな俺が恭也に勝てたのは恭也が俺の挑発に見事に乗ってくれたのとルティアさんのおかげでE×ランクになっている俺の身体能力、そして俺の前世の経験のおかげだ。

俺は前世で不良やチンピラに絡まれている友人やクラスメート、同じ学校の生徒を見かける度に助けていた。そんなことをしているうちにケンカの腕が上がってしまったのだ。おかげで町の不良共の間ではちよつと名の知れた有名人になってしまった。ま、今の俺にはもう関係のない話だが。

「ふゝんそつか。ね、今度はあたしも手合せしない？」

と、美由希さんが俺の顔を覗き込んでそんなことを訊いてくる。

「えゝつと、まあ・・・機会があったら」

俺は曖昧に返事をする。不必要な戦いはしたくないんだが・・・。

「うんっ、楽しみにしてるね」

美由希さんはなんともいい笑顔で言ってくる。

「じゃあ、りょうくん。なのはともまた遊ぶ約束しょ？」

こんどはなのはが笑顔で言ってきた。

「ああ、もちろん。いっぱい遊ぼうな」

これには俺ははつきりと返す。

「うんっ、えへへ」

「ご機嫌な表情なのは。こんな約束で笑ってくれるならいくらでもしてやろうって気になってくる。」

「あらあら、すっかり仲良しさんね」

そんな俺たちの様子を桃子さんが微笑ましい感じで見ている。

「うん！だってなのはとりょうくんはともだちだもん！！」

満面の笑顔を見せてくれるなのは。その笑顔とその言葉になんだかとても満たされる気持ちになってくる俺。今心から思う。ああ・・・この子を救えて良かった・・・・と。

「あらあら」

「あはは」

そんななのは桃子さんも美由希さんも嬉しそうに見つめる。

「ふう、ごちそうさまでした。さてと・・・じゃあそろそろ帰ります」

俺はケーキを食べ終えて席を立つ。

「えっ？りょうくん帰っちゃうの？」

なのはが寂しそうに訊いてくる。

「うん。いい加減帰らないと家族が心配するから」

「そっか・・・そうだね」

しゅんと項垂れるなのは。本当に残念そうだ。俺はなのはの頭に手を置いて優しく撫でてやる。

「大丈夫だよ、また遊びに来るから。約束しただろ？」

「・・・うん！」

顔を上げて笑顔を見せてくれるなのは。

「じゃあ、桃子さん、美由希さん、ごちそうさまでした。ケーキ、おいしかったです」

桃子さんと美由希さんにお礼を言う。

「どういたしまして。また来てね」

「いつでも歓迎するから」

二人も笑って答えてくれる。

「はいっ……あ、桃子さん？」

「なに？」

「あの……よければケーキを二つほど貰えませんか？家族にも食べさせてあげたくて」

俺は少し図々しいかと思ったが桃子さんに訊いてみた。俺だけ翠屋のケーキを食べたことがヴィルヘルミナとエヴァに知られたらどんな目に合わされるか……考えただけでも恐ろしい。俺の脳裏に般若のオーラを出した二人の姿が浮かぶ。

「ええ、もちろんいいわよ。ご家族の方にもうちの味を知ってもらいたいし」

桃子さんは笑顔で承諾してくれた。

「ありがとうございます」

俺はペコリとお辞儀をする。

そして俺はエヴァにショートケーキ、ヴィルヘルミナにチョコレートケーキを貰い、店を出た。

俺は家への道を歩きながらこれからのことを考えていた。そう、



これからののが巻き込まれることになるそして、俺が介入していくことになる事件のことを。

プレシア・テストロッサが引き起こすジュエルシード事件。

呪われた魔導書閣の書を巡る闇の書事件。

そして十年後に起こるだろう狂気の科学者ジェイル・スカリエツティと戦闘機人たちによるJ・S事件。

さらにはその後にある犯罪者一家フツケバインファミリーやエクリプスウィルス感染者たちとの死闘。

それだけではない。ルティアさんが言っていた俺がこの世界に来たことによつて起こるイレギュラーのことも。

それらを思い、俺はこれから一緒に戦っていくことになる相棒たちに訊く。

「なあ、アラストール、マルコシアス」

「む？どうした？」

「あん？なんでえ？」

「俺は……護れるのかな？なのはを、フェイトを、はやてを、みんなを……護れるのかな？」

俺は自分の中にある不安を口にする。護れるのだろうか？護り切れるのだろうか？護り通せるのだろうか？そんな不安が俺の心を締

め付ける。

そんな俺の問いに二人は・・・・・・・・。

『ふん・・・・・・・・何を言っている』

『けっ、何言つてやがる』

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

『『当たり前だ（じゃねえか）』』

本当に至極当然のように答えた。

「!!--」

『お前は誓ったのだろう？あの子を護ると、これから出会う者たちを護ると、ならば何を恐れる必要がある？』

『お前えはただ、自分のやりてえことを、やりてえようにやりやあいいのさ。俺たちはどんな時でもそれに力を貸すだけだ』

二人の言葉が俺の心に深く染み込む。

『そして、忘れるな。お前は一人で護るのではない』

『俺たちと一緒に護るんだ』

その言葉は俺の心を締め付けていた不安を根こそぎ消し去っていく。

『我らは常にお前と共にある。お前が望むのなら、我らは盾にも、剣にもなる』

『そのために俺たちはお前と一緒にいるんだからな』

なんだろう。心がすごく暖かくなってくる。

『共に行こう！そして共に護ろう！我らが主よ！！』

『行こうぜ！我が爪牙の担い手、神薙療！！』

不安は全て消し去られた。

「・・・ああ・・・ああ！！」

二人の言葉に俺は力強く答える。そうだ。何を不安に思うことがある。俺は一人じゃない。俺には一緒に戦う仲間が、一緒に大切なものを護る仲間がいるんだ。

これからたくさんの困難や強敵が立ちはだかるかもしれない・・・だからどうした。それがどうした。そんなもので俺が歩みを止めるものか。俺は誓ったんだ。なのはたちを護ると、彼女たちの運命を変えてみせると。必ず護って見せる。そのために俺はここに来たのだから。

「行こう！！一緒に！！」

俺は前を向く、新たにした決意と覚悟を示すように。

必ず、護る。それを己の魂に誓って。

## 第十一話 これからのこと（後書き）

いかがでしたでしょうか？

前書きにも書きましたが次の次あたりで、無印編に入るのを予定しております。

感想、意見等がありましたら遠慮なくお送りください。いつでもお待ちしております。

ではまた次回お会いしましょう。

## 第十一話 全快パーティー（前書き）

次からようやく原作突入です。

これからはさらに気合を入れていきます。応援よろしくお願いします。

では第十一話始まります。

## 第十一話 全快パーティー

S i d e 燎

翠屋からの帰り道、俺は今日のことを思い返してみた。

なのはと出会い、土郎さんを治療し、翠屋へ行つて恭也と決闘して、桃子さんにケーキをご馳走になった。

（なんか・・・今日は色々あったなあ・・・ちょっと疲れた）

そんなことを思っているうちにいつの間にか家に着いていた。俺は扉を開けて中に入る。

「ただいまー・・・ん？」

家の中から何やらいい匂いが漂ってきた。

（この匂いは・・・シチューか？）

俺は匂いのもとを辿って台所を覗いてみた。そこには・・・

「ヴィルヘルミナ？」

そう、ヴィルヘルミナが料理を作っていたのだ。

「！おかえりなさいであります」

『**歸宅歡待**』

俺に気づいたヴィルヘルミナとティアマトーがお帰りと言ってくれる。

「ああ、ただいま……なにしてるの？」

俺は思わず訊いてみた。

「？見ての通り夕飯を作っているところではありませんが？」

晚餐準備

二人は不思議そうに答える。

「料理……できるの……？」

俺は少しおかしく思った。俺の記憶が正しければ、原作のヴィルヘルミナは料理ができなかったはずだ。これはいつたいどういうことだ？確かに夕飯の準備をしておくとは言ってたが、俺はてっきり弁当でも買ってくるものとはかり……。。

「私は燎様の身の回りのお世話をするために女神から家事能力を与えられているのであります」

不思議に思っている俺にヴィルヘルミナがそう教えてくれた。

（そういうことか・・・ルティアさん・・・なんというか・・・まあ・・・グツジョブだ）



俺は心の中で俺をこの世界に送ってくれた女神様に親指を立てた。

「燎様、そろそろ出来上がるのでエヴァンジェリンを呼んできてもらってもいいですか？」

「ああ、わかった」

俺はヴィルヘルミナに頼まれてエヴァを呼びに行った。

「おい、エヴァ。ご飯だぞ」

エヴァの部屋の前に立ってエヴァを呼ぶ。

「ああ、すぐ行く」

部屋から返事が返ってきた。俺は返事を聞いて居間に戻った。

戻ってみるとすでにヴィルヘルミナが三人分のシチューを用意していた。

「ほお、今日はシチューか」

俺のすぐ後からきたエヴァが湯気がのぼるシチューを見て言う。

「美味しそうだな」

俺はシチューの出来栄を見て感想を言った。

「冷めないうちにどうぞであります」

俺とエヴァは自分の席についた。

「それじゃあ、いただくか」

「はい」

「うむ」

「「「いただきます！」」」

俺たちは同時にシチューを口に入れた。

結論から言うとヴィルヘルミナの作ったシチューは最高の出来だった。

しばらく経って俺たちはシチューを食べ終わった。

「ごちそうさま」

「うん、美味かったぞヴィルヘルミナ」

「恐縮であります」

いや、ホントに美味かった。俺とエヴァなんて三杯ほどお代わりをしてしまった。

「さて、夕飯も食べたしお次はデザートだな」

そう言っ て俺はお土産をテーブルに乗せる。

「？ 燎様、それは？」

「燎、なんだそれは？」

二人が質問してくる。

「今日、出かけたときにいい店見つけてさ、買ってきたんだよ」

俺は箱を開けて中を見せる。

「これは……」

「ほお、ケーキか」

中には三つのショートケーキが入っていた。

「二人にお土産。ヴィルヘルミナ、お皿持ってきてくれる」

「はいであります」

俺に言われてヴィルヘルミナはすぐさま皿を三つ持ってきた。俺はケーキを皿にのせる。

「はい、どうぞ」

一つつつケーキを二人に差し出す。

「わざわざ、買ってきてくれたのでありますか？」

「我がマスターは気が利くな」

二人は嬉しそうな感じた。

「それじゃ、いただきます」

俺たちはケーキを食べる。・・・うん、やっぱり美味しいな。

「こ、これは・・・」

「な、なんと・・・」

二人はスプーンを持った手をプルプルと震わせている。

「う・・・うまい！」

「見事な味であります」

どうやら、翠屋のケーキは二人の口に合ったようだ。

俺はケーキを食べながら、今日あったことを二人に話した。

こうして、俺のこの世界の初日は終了した。

それから数日間、俺はなのはと遊んだり、時折士郎さんを見舞って治療したりとそんな感じに過ごしていた。他にもヴィルヘルミナとエヴァを紹介したり、ヴィルヘルミナが桃子さんからお菓子作りを教わったりと大した事件もなく至って平和な日々が続いていた。

そんなある日、なのはから電話が掛かってきた。

「もしもし、なのは？どうした？」

「あ、あのね！りょうくん！おとうさんがね！怪我が治ってね！お医者さんからね！電話があって、それでこれからみんなだね！」

「……うん、とりあえず落ち着け」

電話の向こうから聞こえてきたなのはの声はとても興奮していた。

ようするに士郎さんが目を覚ましたとお医者さんから連絡があった、それでこれから皆で会いに行くらしい。

「そっか……よかったな、なのは」

「うん！-！」

とても嬉しそうなのは声、本当によかった。俺も頑張った甲斐があったな。

「それでね、りょうくん。おとうさんがたいいんしたらみんなでお祝いするんだけど、よかったらりょうくんやエヴァちゃんにヴィルヘルミナさんも一緒にどうか？」

「それはうれしいけど・・・いいのか？」

「もちろん！お母さんもぜひきてほしいって！！」

そう言われたら断るのも失礼だな。

「わかった。お邪魔させてもらっよ」

「うん！じゃあまたね、りょうくん！」

「ああ」

話し終えた俺は電話を切った。さて、二人にもお祝いのこと伝えないと。

それから一週間後、俺たちは土郎さんの退院を祝うために翠屋に来了。

「よく来てくれたね。初めまして、僕が高町土郎だよ」

土郎さんが笑顔で俺の頭を撫でてきた。

「初めまして、神薙療です。退院おめでとうございます」

俺も挨拶を返した。

「あはは、どうもありがとう。そちらの二人も来てくれてありがとう  
うございます」

士郎さんが後ろのヴィルヘルミナとエヴァにも声を掛けた。

「お気になさらず。呼んでいただき感謝するのであります」

「まあ、私は美味しいケーキがたらふく食えると聞いて来たんだがな」

と、二人が返事をする。っていうかエヴァ、お前はちょっと自重しろ。

「あはは、もちろん。たくさんあるからね。好きなだけ食べていてくれ」

士郎さんは大して気にしたふうもなく俺たちを歓迎してくれた。  
そして全快パーティーが始まった。

全員、それぞれにパーティーを楽しんでいる。ヴィルヘルミナは士郎さんと桃子さんと一緒に世間話に花をさかせている。エヴァは美由希さんと意気投合してケーキを食べまくっている。あれ？恭也の姿が見えないけどどこ行っただ？まあ、いいか。

そして俺はというと……………。

「はいりょうくん。あーんなの」

俺の隣に座ったのはが俺にケーキを刺したフォークを向ける。

「い、いやなのは、自分で食えるから」

そうなぜか俺は今なのはにあーんをされているのだ。自分で食えると何度も言っているのに全く聞きやしない。

「いいから。あーん」

さらにフォークを近づけるのは。まったく、仕方ない。

「あーん」

俺は口を開けてケーキを口に入れる……うん、うまい。

「えへへ……りょうくん、おいしい？」

「ああ、美味しいよ」

俺は笑って答える。

「えへへへ／＼／＼」

なんだかなのはの顔が赤いように見えるのだが……気のせい  
か？

「おい」

ふいに後ろから声を掛けられて振り返ると恭也が立っていた。



「何か用か？」

俺は少し険しく訊いた。

「あー、その、なんというか……だな」

なにやら、恭也が言いあぐねている。いったいなんだ？

「このあいだは……すまなかった！」

いきなり頭を下げて俺に謝罪する恭也。……え？なに、この状況？

「あのあと、お前に言われたことをよく考えてみたんだ。お前の言うとおり、俺がしなければならぬことはあんなことじゃなかった。お前のおかげで目が覚めたよ。ありがとう」

恭也……。

「別に、お礼なんていいよ。俺はただおせっかいを焼いただけだ。それに、お前が謝る相手はこっちだろ？」

俺は親指でなのはを指した。

「ふえっ！？」

いきなりふられてなのはは驚いた。

「……ああ、そうだな……」

恭也はなのはと向き合う。

「なのは……ごめんな、お前もすごく辛かったのに、ずっとほったらかしにして。ホントに、駄目な兄貴だったな……」

それは、恭也の心からの謝罪だった。それを受けたなのは……

「ううん、そんなことないよ。お兄ちゃんだってつらかったよね。なのはも気づいてあげられなかったから、お相子だよ」

なのはは、恭也を許した。そして自分も同罪だと言った。

（やれやれ、やっぱり兄妹だな、この二人）

「なのは……これからも、俺はお前のお兄ちゃんできて……いいかな？」

「うん。なのはもお兄ちゃんの妹でいたい」

二人はお互いを許しあった。これでもう、この二人はきっと大丈夫だ。

こうしてなのはと恭也は、再び兄妹の絆を結び合った。

## 第十一話 全快パーティー（後書き）

さて、次回からいよいよ無印編です。

けっこうかかってしまい、申し訳ありません。

こんな作者で恐縮ですがこれからもどうかよろしくお願いします。

感想、意見、いつでも受け付けます。

ではまた次回、楽しみに。

無印編 第一話 原作の始まり（前書き）

ついに原作突入です。

はたして主人公は少女達を守り通せるのか。

ではお楽しみください。

あと、無印編のOPとED決めました。

無印編OP TERMINATED：境界線上のホライゾンOP

無印編ED I'll Believe：灼眼のシャナ？ED

## 無印編 第一話 原作の始まり

Side 三人称

ドガッ！ガキッ！ゴガッ！

荘厳な雰囲気のある大理石の広間に衝突音が連続で響き渡る。その音を生んでいるのは広間を縦横無尽に駆け回り、飛び回る二つの影。神薙燎と彼の従者エヴァンジェリンだ。

彼らは今天道宮の大広間でこの三年間毎日続けている朝の模擬戦の真っ最中である。何度も何度も激突しては距離を取り、また激突する。それを繰り返している。

ズガンッ！ドゴッ！バギンッ！

両者の激突は回を増すごとに激しくなっていく。それだけではなく。二人の拳が蹴りが合わさる度に衝撃波が生まれ広間中に轟く。常人ではまず居留まる事すら不可能であろう。しかし、そんな状況で顔色一つ変えることなく二人の戦闘を見続ける者が一人。エヴァンジェリンと同じく燎の従者ヴィルヘルミナである。彼女はその場を一步も動かず、向かってくる衝撃波を全身に受けてもまるで何も感じていないと言わんばかりに平然とその場に留まり二人の模擬戦とは言い難い模擬戦を見つめる。

「はははっ、いいぞ燎！よくここまで強くなったものだ！」

「あつたりまえだ！散々お前とヴィルヘルミナにしごかれたんだぞ、

強くないわけが・・・ないだろ!!」

エヴァンジェリンの賞賛に燎は笑って答え、回し蹴りを放ち、エヴァを弾き飛ばす。

「ぐっ!」

エヴァは蹴りが当たる寸前で腕を交差させてガードした。そして空中で一回転し、着地した。

それを追って燎も大理石の床に下りる。

「さあ、まだまだいくぞエヴァ」

燎は構えをとり、全身に魔力を漲らせる。

「いいだろう。来るがいい!」

エヴァも受けて立つ気にいる。右手に断罪の剣を出した。

ゴガガガガガガ!!!!

二人の体から溢れ出した魔力がぶつかり合い、せめぎ合っている。どう見ても模擬戦の域を逸脱していると思っのだが。

「おおっ!」

「はあっ!」

同時に床を蹴り、飛び出す両者。再度激突しようとした瞬間。

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ッ

「そこまでであります」

『試合終了』

アラームが鳴り響き、ヴィルヘルミナとティアマトーが模擬戦の終了を告げる。

「うおっと」

「おっとお」

二人は何とか寸前で急ブレーキをかけて止まった。

「もう終わりか？」

「やれやれ、これからがいいところだったのに」

乗り気になっていたところで急に試合を止められて不満げなエヴァ。

「燎様、そろそろ支度をしなければ学校に遅れるのであります」

『早急準備』

「ああ、そうだな。じゃあ、俺は先に戻ってるから」

ヴィルヘルミナとティアマトーに言われて、家に転移しようとする

る燎。

「朝ご飯はすでに作ってあるのであります」

「ああ、ありがとっ」

ヴィルヘルミナに礼を言い家に転移した。

「しかし、燎のやつ、この三年でまさかここまでのものになるとはな」

燎を見送ってからエヴァがふいに感慨深げに言った。

「そうでありますな」

『同感』

ヴィルヘルミナとティアマトーも同意する。

「最初の頃は、私達に一撃すら当てられなかったというのにな」

そう、燎はヴィルヘルミナとエヴァと一緒に修行を始めた時は二人に全く歯が立たなかったのだ。しかし今では、二人を同時に相手にしても引けを取らないどころか問題なく相手できてしまい、勝ててしまうぐらいの力量になっている。凄まじいまでの才覚である。

「そつえば、もうそろそろか」

「?・・・ああ、原作でありますか?」



「ああ……」

二人は天井を見上げる。この世界に来てから三年、まもなくリリカルなのはの原作が始まるのだ。自分達の主にとって、とても重要な時が。

「忙しくなるな」

「でありますな」

二人はしばらくじっとステンドグラスの張られた天井を見つめていた。

「ヴィルヘルミナ」

「？」

ふいに呼びかけられてヴィルヘルミナはエヴァに目を向ける。

エヴァもヴィルヘルミナに目を向けた。

「何があるつと……必ず燎を守り抜くぞ」

その目はその覚悟を映し出したかの様に燦然と輝いていた。

「……無論であります」

『絶対守護』

ヴィルヘルミナもまた覚悟を映した目でエヴァを見据え、ティマ

トーは覚悟を込めた声で答えた。

二人の従者は改めて決意の炎を己の魂に宿した。

S i d e 燎

朝の修行を終えて天道宮から戻った俺はヴィルヘルミナの作っておいてくれた朝ご飯を食べて制服に着替えた。もちろん私立聖祥大附属小学校の制服だ。着替えを終えてランドセルを背負い玄関で靴を履き、扉を開ける。

「いつてきまーす！」

俺は勢いよく家を飛び出した。そのままバス停まで走る。

バス停に着いてしばらく待っていると二・三分ぐらいしてバスが来て乗った。

「あつ、燎くん、おはよー」

「おはよう、燎くん」

「燎、こっちこっち」

この三年間で聞き慣れた声が俺を呼ぶ。一番後ろを見てみるとよ

く見知った三人が居た。

そこにいたのはご存知聖祥の三人娘、俺の幼馴染の高町なのは、クラスメートで友達の月村すずか、同じくクラスメートで友達のアリサ・バニングス。

「おう、おはよう」

俺は挨拶をして三人が座っている場所に向かった。

さあ、いよいよ物語の幕が開く。必ず全ての悲しい運命を変えてみせる。

無印編 第一話 原作の始まり（後書き）

さあ、原作が始まりました。

これからどうなっていくのか、主人公はどのように物語を変えていくのか。

楽しんでいただければと思います。

では今回はこの辺で。

また次回をお楽しみに。

無印編 第二話 朝の会話・自分の将来（前書き）

突然ですが皆さん、子供のころの夢って何でしたか？

ちなみに私はサッカー選手でした。

と言ってもなりたいではなく、なれればいいなという感じでした  
が。

皆さんはどうでしたか？

私は残念ながら断念してしまいましたが、いまこうして小説を書いて  
沢山の人に読んでもらっているのはとても楽しいです。

まあ、この話はこれぐらいにして・・・

では、無印編第二話始まります。

## 無印編 第二話 朝の会話・自分の将来

S i d eなのは

こんにちは、わたしは高町なのといいます。聖祥大附属小学校に通う、ごくごく普通の小学三年生です。家族はお父さんとお母さん、それにお兄ちゃんとお姉ちゃんがあります。昔は色々ありました。が今では仲良し家族です。これも燎くんのおかげです。あ、燎くんというのはわたしの幼馴染の友達です。それで……その……わたしの……好きな人です／＼／＼。

もう三年越しの片思いです。でも、未だに燎くんは気付いてくれません。もうっ、燎くん鈍すぎなのっ！……まあ、それはそれとして、今ではすずかちゃんとアリサちゃん、二人も友達ができて、毎日がとっても楽しいです。ところで今日、なんだか変な夢を見ました。真っ黒い怪物に男の子が襲われている夢です。それに夢にしてはなんだか妙にリアルでした。でも、ただの夢だと思って気にしないことにしました。

このとき、わたしはまだ知りませんでした。この夢がわたしの人生を大きく変える始まりであることを。

S i d e燎

（今日の夢……ユーノだったな。じゃあ、今夜あたりが原作開始ってことになるのか。帰ったら二人にも伝えとかなきゃな）

俺はヴィルヘルミナの作ってくれたミニハンバーグを口に入れながら、今日見た夢について考えていた。あれがユーノなら、間違いなく今夜、なのはがユーノと出会い、魔法少女になる。色々と準備しておかなきゃな。

「……よう……りょう……燎ってば！」

「ん？」

いきなり名前を呼ばれたので俺は横を向いた。アリサがこっちを見ていた。

「なんだよ、アリサ？」

「なんだよじゃないわよ。さっきから呼んでるのに全然返事しないんだから」

どうやらかなり考え込んでいたらしい。

「ああ、悪いな。ちょっとボーっとしてた」

俺は素直に謝った。

「どうかしたの燎くん？」

今度はさすがが聞いて来た。

「なんでもないよすずか。ちょっとな・・・」

俺はそう言っただけで誤魔化した。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・？なのは？」

「ふえっ！？」

さっきからずっと黙りっぱなしだった俺のはに声を掛けてみた。  
なのは俺の声に反応して驚いたようにこっちを向いた。

「な、なに燎くん？どうかした？」

慌てているのは少し可愛いと思ったのは内緒だ。

「いや、お前さっきから黙りこくったままだから」

「え？そ、そうだったかな？にやははは」

俺の言葉に苦笑するなのは。

「どうしたんだ？」

俺はなのはに訊いてみた。

「うん・・・あのね、さっきの授業で先生が言っていた将来のことを考えてたんだ」



「将来？」

鸚鵡返しに訊く。

「うん……」

将来、将来ねえ。昼飯食つてるときに考えるようなことでもないと思うんだが。

「アリサちゃんとすずかちゃんと燎くんはもう大体決まってるんだよね？」

そうなのはが訊いてくる。なにか参考になるものがないか期待してるのだろうか？

「でも、全然漠然とよ。将来パパの後を継げればいいかなあってぐらいだし」

「わたしは機械とか好きだから、工学系にすすめればなあって思ってるだけだし」

アリサとすずかがなのはの問い掛けに答える。いや……アリサ、すずか、それも小学三年生が考えるものとしては、どうなんだろう。

「そっかあ、燎くんは？」

今度は俺に振ってくる。

「俺か？俺は……別にないな」

ズルッ！

「・・・？なにやら横を向いてみるとなのはたちが椅子から滑り落ちそうになっている。どうかしたのか？」

「あ、あんたねえ、ちょっとは真面目に考えなさいよ！」

と、アリサが吠えてくる。結構真面目に答えたつもりなんだが。

「あはは、で、でも燎くんらしいかも」

さすがが苦笑しながら言ってくる。っていかすずかよ、俺らしいってなんだ？

「そっか、燎くんはまだなんだ」

なのははすこし残念そうだ。どうやら期待してたものは得られなかったようだ。

「ま、そんなに焦って考えることもないだろ。俺たちはまだ小学三年生なんだ。考える時間なんてまだまだあるよ」

俺はなのはを元気づけるために言う。

「・・・うん、そうだよね」

そう言ったなのはの表情は少しだけ明るくなっていた。

「でもさ、なのはは喫茶翠屋の二代目じゃないの？」

ふいにアリサが言ってきた。

「うん、それも将来のヴィジョンの一つではあるんだけど・・・」

そう言ってなのは少し俯く。

「やりたいことがあるような気はしてるんだ。でも、それがなんなのかわからないって感じで。それにわたし・・・あんまりひとに自慢できるようなところもないし・・・」

そう言いながらどんどん暗い顔になっていくのは・・・  
たく、ホントにこいつは・・・。

「バカチン!!」

ベチッ!

「うわっ!?!」

いきなりアリサがなのはにレモンを投げつけた。レモンは見事なのはの頬に貼り付く。

「自分のこと簡単にそんなふうに言うんじゃないの!!」

アリサは自分を簡単に卑下したなのはに対して本気で怒っていた。まあ、気持ちは分かる。アリサがレモンを投げつけなきゃ、俺がこの馬鹿にデコピンをかましていた。

「そうだよ。なのはちゃんにしかできないこと、きつとあるよ」

すずかも同意してくる。この二人、性格は真逆だが、友達思いなところは一緒なのだ。類は友を呼ぶとはこのことか。

「だいたいあんたねえ、理系の成績はこのあたしよりも良いじゃないの！それで自慢できるものがないとか、どの口で言うかあゝ」

アリサがなのはの頬を抓る。思いつきり抓る。なのはの頬がまるで餅のように伸びる伸びる。

「だ、だってなのは、文系苦手だし、体育も苦手だしゝ（泣）」

涙声でなのはが言う。その状態でまともに言えるとは器用な奴。

「あ、ああ、り、燎くん・・・」

すずかが困った感じで俺を見る。何とかして欲しいようだ。やれやれ、しかたがないな。

「おい、アリサ。その辺で許してやれよ。なのはも反省しただろうし」

俺がそう言うとアリサは俺を一瞥してなのはの頬から手を離れた。

「まあ、いいわ。このぐらいで勘弁してあげる」

「あつゝ、燎くん、ありがとおなの」

なのはは真っ赤になった頬をさすりながらお礼を言ってくる。

「ま、あれだ。そんなに深く考える必要もないさ。別にやりたいことがなくても、将来素敵な相手を見つけて結婚して、幸せな家庭を作るってのも立派な夢だと思うぜ俺は」

「素敵な……」

「相手と……」

「結婚……」

何故か俺のほうを見ながら三人娘の顔が赤くなっていく。

「……？どうかしたか？」

俺は不思議に思っただけで訊いてみた。

「えっ？う、ううんっ」

「べ、べつに」

「な、なんでもないわよっ！」

と、三人は顔を赤くしたまま俺から顔を逸らした。なんなんだ、いったい？

「ね、ねえ」

「ん？」

ふいにアリサが口を開く。

「あ、あんたはさ、将来そんなふうに過ごせたらいいなって……  
思っの？」

そんなことを尋ねるアリサ。

「あ？まあそりゃあな、そうできたらいいなって思っけど？」

と、俺は正直に答える。

「そ、そっかあ。そうなんだ。うふふふ／／／／」

「そっか、燎くんはそういうのがいいんだ。だったらわたしも……  
．／／／／」

「結婚、燎くんのお嫁さん、え、えへへ／／／／」

なんだろう、なんだか三人が恐い。いったいどうしたというのだ  
ろっ？

（なあ、アラストールよお……）

(いっな、マルコシアス)

(・・・はあ)

二機のデバイスは人知れずため息をついていたとか。

無印編 第二話 朝の会話・自分の将来（後書き）

さて、今日のところはここまでです。

お楽しみいただけたでしょうか？

ではまた次回お会いしましょう。

最近寒くなってきました。風邪などひかないようにお過ごしください。

それでは。



### 無印編 第三話 原作介入開始（前書き）

はい更新です。実は私少しばかり風邪を引いてしまいました。

といっても大したことはないんです。咳がと鼻が出るだけですから。

やっぱり、この季節は風邪を引きやすくなるんですね。皆さんも十分に注意してください。

それでは無印編第三話始まります。

無印編 第三話 原作介入開始

S i d e 燎

学校が終わって放課後、俺たちは雑談をしながら家路についていた。

「はあゝあ、今日の授業も退屈だったなゝ」

俺は伸びをしながらぼやく。

「にやはは、燎くん今日もほとんどの授業寝たもんね」

俺の隣を歩いているのはが苦笑している。

「まったく、なんでそれでいつもテストじゃいい点取れるのかしら」

アリサはなんだか納得いかないといった感じだ。・・・って言うてもな。俺の頭は二十歳の大学生なわけだし、小学校の勉強くらい簡単に解けなきゃみっともないだろ。

「でも、体育の時間じゃ、いつも通り活躍してたよね？」

と、今度はさすがが言ってくる。

「それはすずかもだろ。お前ホントに見かけによらず運動神経良いよな。どっかの誰かさんとは大違いだ」

そう、すずかは本当に見た目に反して運動が得意なのだ。これも夜の一族の血の影響なんだろうか。

「ねえ燎くん、そのどっかの誰かさんて誰のことなのかな？かな？」

なのはがジト目で俺を睨んでくる。しかも軽くひぐらし化してるし……。

「さあ、誰のことかな？」

俺は口笛を吹いて目を逸らす。

「むう……。……。あ、そうだ燎くん。お母さんがねよかったらまたお店の手伝いして欲しいって言ってたよ」

「……。え？」

なのはの言葉に俺は固まってしまった。

「……。手伝い？」

「うん……。」「

「それってまた、あの服着て？」

「そう……。かも？」

俺の脳に忌まわしい記憶がフラッシュバックする。あの悪夢がまた……。。

「なんで、男の俺があんな服着なくちゃいけないんだよ」

俺は脱力しながら愚痴る。

「にやははは、でも似合ってたよ。燎くんのメイド服」

なのはが笑顔で言う。

ぎゃあああああ！やめろおおおお！言うなああああああ！  
！・・・・・・そう、以前俺は桃子さんにお店の手伝いをしてほしい  
と言われてどれでも好きなケーキ一週間タダの条件で引き受けたの  
だ。そのときに何故かメイド服を着させられて、お客さんたちに「  
いらっしやいませ、ご主人様」と言いながら接客をさせられたのだ。  
そのときの翠屋はいつにも増して繁盛した。男だけでなく、女の人  
にまで人気があつたのは意外だった。写メを取る人や、頭を撫でて  
くる人もいた。それだけならばまだいい。中には、危ない目をして  
俺を見てくる人もいた。正直に言っであんなの二度とごめんだ。

ちなみにエヴァとヴィルヘルミナがメイド姿の俺を見たら鼻血が  
噴水のように吹き出てとてもいい笑顔で気絶した。

「なのは、桃子さんに言っといてくれ。女装なしなら引き受けるっ  
て」

俺はなのはに桃子さんに伝言を伝えるように言う。

「うん、わかったの。お母さんに言っておくね」

なのはは了承してくれた。俺は胸を撫で下す。ふう、これで女装  
させられる心配はなくなつたな。

その後俺たちは雑談を続けながら歩いた。やがて雑木林のところを通り掛かる。すると……。

（たすけて……………）

「ん？」

「えっ？」

（今の声は……………）

聞こえてきた念話に俺は耳を澄ませる。

（おねがい……………だれか……………）

「え？なに？」

ふいになのはが立ち止まる。……………やはりなのはにも聞こえたか。

「なのは？」

「なのはちゃん？」

アリサとすずかも止まって振り返り、なのはを見る。

「どうした？なのは？」

俺はなのはに尋ねる。まあ、分かってるんだけどな。

「あの、燎くん。今、声が聞こえなかった？」

「声？」

「……やっぱりか。」

「声ね。アリサとずすかは何か聞いたか？」

俺は後ろを振り向いて二人に尋ねた。

「ううん」

「わたしたちはなにも……」

二人は首を横に振って否定する。

「でも、今確かに……」

（おねがい……たすけて……）

「！やっぱり聞こえた。……こつち！」

ダダッ！

いきなりなのは走り出し雑木林の中に入っていった。

「ちょ、なのは！？どうしたのよ!？」

「なのはちゃん!？」

ダダダッ!!

アリサとすずかもなのはを追って雑木林に入ってしまった。俺も三人の後を追う。

なのはの後を追って雑木林の奥に行ってみると、なのはがしゃがみ込んでいた。手に何かを抱えている。

「なのは!」

「なのは!」

「なのはちゃん!」

なのはは俺たちの声に反応してこちらを振り向く。

「燎くん、アリサちゃん、すずかちゃん……この子……」

なのはは手に抱えていたものを見せる。

それは首に赤い宝石のついた首輪を付けたフェレットだった。  
・  
・  
間違いない。ユーノだ。

「ちょ、どうしたの? その子?」

「怪我してるみたい」

二人は突然のことに対応できず慌てている。

「なのは、そのフェレットは？」

俺はなのはに事情を訊いた。

「あ、あのね、わたし、なにか声が聞こえたような気がして、来てみたらこの子が倒れてて……」

なのはは狼狽えながらも説明した。

「そうか……。わかった。とりあえず、病院に連れて行こう。アリサ、確か近くに動物病院があったよな？」

俺はアリサに尋ねる。

「え？……。う、うん。あるわよ」

アリサは戸惑いながら答えた。

「案内してくれ。このままだとヤバイことになる」

俺は真剣さをだしながらアリサに頼む。

「わ、わかったわ。こっちょ」

アリサは走り出した。そのあとを追って俺たちはユーノを連れて動物病院に向かった。



アリサの案内に従って俺たちは動物病院に辿り着き、ユーノを先生に診てもらった。

「先生、どうですか？その子の容体は？」

なのはが不安そうに先生に尋ねる。

「大丈夫。そんなに大した怪我じゃないから、少し休めばすぐよくなるわ」

先生は安心させるように言う。その言葉になのはたちはホッとす

る。

「あの、先生、この子……フェレットですよね？」

ふいにすずかが先生にそんなことを訊く。

「フェレット……なのかしら？知らない種だけど……」

先生もよく分からないと言った感じた。ま、無理もないかもな……。

「まあとりあえず、この子のことは私に任せてあなた達は今日はもう帰りなさい。あんまり遅くなると家の人心配するわよ」

先生が俺たちに帰宅を促す。

「はい、お願いします。・・・あれ？」

なのはがベッドで寝ているユーノを見る。

「なのは？」

「なのはちゃん？」

「どうしたのよ？」

俺たちも同じようにユーノを見る。

「あ、この子・・・」

「目を覚ましたみたい」

ユーノは震えながらも起き上がろうとするが、力が入らないのかうまくいかないらしい。

「これなら大丈夫そうね」

先生がフェレットの様子を見て言う。

「はい・・・？」

（なのは？・・・！こいつ・・・）

なのはを見る。どうやらなのはの魔力資質に気づいたようだ。なのはが手を伸ばすとフェレットは匂いを嗅いだ。後なのはの指の先

を軽く舐めた。．．．ほほう、初対面の女の指を舐めるとは、噂に違わぬ淫獣ぶりだなユーノ。

なのはの指を舐めた後ユーノはまた気を失った。俺たちはユーノを先生に任せて家に帰った。

あれから時間が経って8時を回ったころ。ベッドの上で本を読んでいると、なのはからメールがきた。どうやら、ユーノを預かる許可を得られたようだ。俺はよかったな、と返信した。

さて、あとはユーノからまた念話が来るのを待つだけか．．．。俺はベッドに横になりそれまで寝ておこうと目を瞑った。

（聞こえますか？．．．僕の声が．．．聞こえますか？）

．．．．．来たな。

（お願いです．．．僕の声が聞こえた方．．．僕のところまで来て下さい．．．力を貸して欲しいんです。どうか．．．お願い．．．）

「……ふう、やれやれ、仕方がない。行くとするか。」

俺は起き上がりベッドから降りて部屋を出た。階段を下りて玄関に向かうとそこにはすでにヴィルヘルミナとエヴァがいた。どうやら二人にも念話が届いていたようだ。

「二人とも……聞いたな？」

俺は一応の確認を取る。

「はいであります」

『傍受』

「ああ」

二人は真剣な表情で答える。

「そうか……」

俺は二人の眼を見る。その眼には一片の迷いも見られない。

『……来たのだな……この時が……』

アラストールが重く言う。

「ああ」

俺は答える。

『ついに……始まんだな……』

マルコシマスが尋ねるように言う。

「ああ」

俺はもう一度答える。

「……じゃあ皆……行くか」

俺は共に戦うパートナー達に決意と覚悟を込めて言う。

『うむ』

『おう』

「（コクッ）」

『御意』

「ああ」

仲間たちはそれぞれに同じく決意と覚悟を込めて答える。

「よし……行こう!!」

俺は扉を開けて外に出る。後にはヴィルヘルミナとエヴァが続く。

俺は外に出ると、魔力で身体強化し、屋根に上がる。ヴィルヘルミナとエヴァも俺に続いて屋根にあがる。屋根に上がると俺は手を

上にかざし、言葉を紡ぐ。己の力を呼び起す言霊を。

「燃え立つ空より来たりて！

正しき決意を胸に！

我は運命さだめを変える剣を執る！

汝、罪を裁きし断罪の劫火！！

アラストール！・・・セットアップ！！」

『承知！セットアップ！！』

俺の全身を炎のような紅蓮の魔力光が包み込み、バリアジャケットを形成する。

形成し終わると俺を包んでいた魔力光が弾けて散った。そこにはバリアジャケットを着た俺がいた。

俺のバリアジャケットはアニメ第1話でシャナが登場したときに着ていた服の上に夜笠を着たものだ。腰には鞘に入った刀を差している。長さはBLEACHの一護の天鎖斬月と同じくらいだ。この体には少し大きいが問題ない。

俺は準備をし終えて、二人と一緒に夜の町を飛んだ。目指すはユニノと恐らくなのはもいる動物病院。

俺たちが家を出て数分、動物病院が見えてきた。しかしそこは無

残な大穴が空けられていた。その病院だけでなく、周りの塀や電柱にも罅や大きな傷跡がついていた。

俺はこの惨状を作った元凶を探す。・・・見つけた！そこには黒く禍々しい姿をしたジューエルシードの思念体がいた。

・・・ん？あれは、なのはか。

思念体のすぐ近くにユーノを抱えて逃げ回っているのがいた。思念体は体から触手のようなものを出してなのはを追い立てている。なのははかろうじて思念体の攻撃を躲けているが、運動神経が切れてるなのはでは長くは持たないだろう。そして俺の予感的中する。なのはは思念体が砕いた塀の瓦礫に足を取られて転んだ。思念体はその隙を逃さずなのはを捕えようと触手を放つ。

（なのはっ！！）

俺は炎髪灼眼を顕現させ虚空瞬動を使い一瞬のうちになのはと思念体の間に割って入り腰に差した刀を抜き思念体の放った触手を一本残さず切り落とした。

シュシュシュン！！・・・ボト、ボト、ボト。

「ふえっ！？」

なのはは可愛い声あげる。

「よう、なのは。こんばんわだな」

俺はなんとも場にそぐわない挨拶をする。

「燎……くん……?」

なのは信じられないものを見たような目で俺を見た。

「ああ、そうだよ。俺だ」

「な、なんで燎くんがここに?それにその恰好は……?」

なのはは混乱してるのかイマイチ状況を呑み込めていないようだ。  
無理もないがな。

「まあとりあえず、話は後だ。まずは……」

「えっ?」

俺は目の前の思念体に目を向ける。思念体は邪魔されたことを怒っているのか異様な呻き声を出して俺を威嚇する。

「そこのヘドロみたいなかぶつを片付けないな」

俺は刀の切っ先を思念体に向ける。

「りょ……燎くん……」

弱々しい声を聴いて振り向くとなのはが揺れる瞳で俺を見ている。

「大丈夫……なのはは……俺が護る」

なのはの目を見て迷うことなく決意を込めて宣言する。



「ふえっ！？／＼／＼」

なんだかなのは顔が赤いような……気のせいかな？

俺は再度思念体に目を向けた。そして声に怒りを滲ませて言う。

「おい、ヘドロ野郎。よくも俺の友達に手を出したな。お前に言葉を理解するだけの知能があるとは思わないが、言っておいてやる」

炎髪と灼眼がさらに輝きを増していく俺の怒りに呼応するかのよう  
うに。

「お前は……震えたことがあるか？」

その身を切り裂き、魂さえも凍てつかせる

死の恐怖を感じたことがあるか？」

俺は燃える灼眼で眼前の敵を見据え、覚悟の言葉を言い放つ。

「震えよ！！！！畏れと共に跪け！！！！」

炎髪灼眼の打ち手が修羅の巷に降り立った。

無印編 第三話 原作介入開始（後書き）

どうでしょうか。今回は中々の自信作です。

アラストールのセットアップの詠唱はデモンベインからとってみました。

燎の決め台詞は聖痕のクエイサーからです。

では次回もお楽しみに。

感想、意見、どんどん送ってください。

お待ちしております。

## 無印編 第四話 魔法少女誕生（前書き）

もうすぐ冬に入ってきますね。ますます寒くなってきますが体調の管理などお気をつけください。

私のほうは熱は一晚寝たらすっかり下がりました。

まあ、まだ咳と鼻が出るのですが……。

皆さんも体を大事にしてくださいね。

では、無印編第四話始まります。

## 無印編 第四話 魔法少女誕生

S i d eなのは

高町なのはです。私は今日、放課後、燎くんとアリサちゃん、すずかちゃん、いつもの三人と一緒に帰る途中、不思議な声を聞きました。耳に聞こえると言うより、頭に直接響くような声でした。その声は、助けを求めています。私はその声が聞こえたほうに走っていきました。雑木林を進んで少し開けたところにつくとそこに首に紅い宝石をつけたフェレットさんが倒れていました。

私を呼んだのは、この子……？

私達は急いでそのフェレットさんを動物病院に運びました。そのあとフェレットさんを誰の家で預かるかを相談しました。アリサちゃんのところは犬をたくさん飼ってるし、すずかちゃんの家は猫さんがいるし、そうなるとなのはと燎くんの家ということになるので、私は夕飯を食べているときに皆にフェレットさんのことを話しました。私の家は喫茶店ですからちよつと心配でしたが、お父さんたちはOKをだしてくれました。私はそのことを燎くんたちにメールで伝えて寝ようとして目を瞑りました。しかし……。

（聞こえますか？……僕の声が……聞こえますか……？）

「ふえっ!？」

これってフェレットさんを見つけたときに聞こえた声？

私は集中して聞こえる声に耳を傾けました。

（お願いです……僕の声が聞こえた方……僕のところまで来て下さい。……力を貸して欲しいんです。どうか……お願い……）

「あ……ちよつと……」

その声は聞こえなくなりました。これってやっぱりあのフェレットさんが……？わからないけど放っておけない。私は服を着替えてお父さん達に気づかれないうちに家を出ました。そのまま病院まで走りました。そしてようやく、病院のところまでくるとなんだか周りの雰囲気が変わったような気がしました。人氣がなくなつて少し不気味な感じです。なんだか怖くなつて引き返そうと思いましたが、なんとか勇氣を出して病院に入ろうとしたら、私の視界にあのフェレットさんが走っていくのが見えました。

「あつ、あれは……」

私はフェレットさんに駆け寄ろうとしましたがそれより先に黒い大きな影が現れてフェレットさんに襲い掛かりました。フェレットさんは間一髪で上に飛んで黒い影の攻撃をかわしました。そしてそのまま私のところに飛び込んできました。私はなんとかフェレットさんをキャッチしました。

「な、なにに？　いつたいなに！？」

私は状況がわからず混乱してしまいました。不思議な声に呼ばれたと思つたらいきなり変な影がフェレットさんを襲つてるし、いつ

たいなにながどうなってるの〜!?

「きて……くれたの……?」

……え?今のつて……。

私はフェレットさんを見ました。

「あ……ありがとう……」

う……うそ……。

「しゃ……しゃべった!」

私は驚いてフェレットさんを落としそうになりました。な……  
なんで、フェレットさんが喋ってるの?

「あ、あの……あなたは、いたい……っ!」

私がフェレットさんに聞こうとしたらあの大きな影がこっちに向  
かってきました。私はなんとかその影をかわしました。

「そ、その……なにがなんだかよく分からないけど、いたいな  
んの?何が起きてるの?」

私はフェレットさんに何が起きてるのか訊きました。こんなのだ  
う考えてもおかしいです。

「君には……資質がある。お願い……僕に少しだけ力を貸して」

私の腕の中でフェレットさんが言ってきました。

「資質？」

なんのことだろう……？

「僕は、ある探し物のために、此处とは違う世界から来ました」

違う世界？ますますわからないよ。

「でも、僕一人の力では想いを遂げられないかもしれない……だから、迷惑だと分かっているんですが……資質を持った人に協力して欲しくて……」

それでわたしを呼んだの……？

「お礼はします。必ずします。僕の持っている力をあなたに使って欲しいんです。僕の力を……魔法の力を……」

「魔法……？」

魔法って……そんなものがほんとに……？

「グルルルアアアア！」

「……」

いつの間にか黒い影はすぐ近くまで迫っていました。影は体から触手のようなものをだして私を捕まえようとしました。私はそれかわしながら逃げましたが、転がっていた瓦礫に足を取られて転ん

でしまいました。

「あうっ」

当然黒い影の怪物は私が転んだのを見逃さずまた私を捕まえるために触手を伸ばしました。

（助けて・・・燎くんっ・・・）

私は心の中でずっと思い続けている男の子の名前を呼びました。昔私が泣いていたとき、私を抱きしめて大切なことを教えてくれた男の子。初めて私の友達になってくれた女の子のような綺麗な顔をした男の子。私の大好きな男の子の名前を。

怪物の触手が迫ってきます。私は目を瞑りました。・・・しかしいつまでたってもなにも起こりません。私は不思議に思ってうっすらと目を開けました。そこには・・・。

「ふえっ!？」

私は思わず変な声を上げてしまいました。なぜならそこには・・・。

「よう、なのは。こんばんわだな」



「燎……くん……？」

まるで燃えているような綺麗な紅い髪と瞳をした私の好きな男の子、燎くんが立っていたからです。

（な、なんで燎くんが……？それに、その髪と眼……）

私は混乱していました。怪物に襲われそうになったら、髪と瞳が紅くなった燎くんが助けに来てくれるなんて、夢にも思いませんでした。でも、こんなときにおかしいですけど、燎くんの燃えているような紅い髪と瞳は暗い夜の中、より強く輝いていて、とても……とても……。

（綺麗……）

私は今の燎くんの姿に見蕩れてしまいました。燎くんは手に持った刀を怪物に向けたままこっちを見て微笑みながら言いました。

「大丈夫……なのはは……俺が護る」

その言葉を聞いて私は自分の顔が熱くなるのが分かりました。りよ……燎くん……。

そして燎くんは、怪物のほうに目を戻して強く言いました。

「震えよ！！！！畏れと共に跪け！！！！」

そう言ったときの燎くんは、すっごく格好良かったです。

S i d e 燎

さて、なんとか間に合ったわけだな。後はこのヘドロ野郎を片付ければ良いだけだ。よし……とその前に……。

（おいお前ら、手を出すなよ？こいつは俺となのはでなんとかする。二人は待機してくれ）

俺は近くの家の屋根にいるエヴァとヴィルヘルミナに念話を飛ばす。

（了解であります）

（ふん、すこしつまらんが……まあ、いいだろう。お前の力、見せてやるがいい）

二人の了解が取れたところで、俺は両手で剣を正眼に構える。

「あ……あの」

「ん……？」

呼びかけられて振り向くとユーノがなのはの腕の中で俺を見ていた。

「あなたは……魔導師……なんですか？」

ユーノはそう質問してきた。まあ、気になるだろうな。この世界は管理外世界だし魔力資質の持ち主は滅多にいないからな。

「ああ……一応な」

俺は無難な答えを返す。

「それよりも、おいフェレット、あれは一体なんだ？」

俺はユーノに思念体のことを訊く。ホントは知ってるんだけどな……。

「あれは、ジュエルシードが暴走した思念体です」

ユーノは俺の問いに真剣に答えた。

「ジュエルシードって……ロストログアじゃないか。なんでそんなものがここに？」

俺は再度聞く。……知ってるけど。

「それは……っ！あぶない！」

ユーノが叫ぶ。思念体が痺れを切らして襲い掛かってきたのだ。だが……。

「遅い!!」

俺は思念体の強襲を見切り、すれ違いざまに刀を横一線に薙ぐ。

「ギエアアアア！！！」

思念体はすさまじい叫び声をあげる。

「す・・・すごい」

ユーノは俺の力量を見て感嘆の息をもらす。

「おいフェレット！なにか手があるならはやくやれ！こいつは俺が抑えておいてやる！！」

俺はユーノに向かって叫ぶ。

「は、はいっ！」

ユーノの返事を聞いて、俺は再び思念体と向き合う。さあて、ここからが本番だ。

俺は刀を構えて思念体に向かって走り出した

S i d eなのは

燎くんが怪物と戦っています。でも私はただ見てるだけです。なんだかすごく悔しいです。私にも力があれば燎くんと一緒に戦えるのに。力が・・・欲しい。燎くんと一緒に戦える力が・・・燎くんを助けられる力が・・・欲しいよ。

「あのっ」

「えっ？」

フェレットさんに呼ばれて私はフェレットさんを見た。フェレットさんは首についている紅い宝石を口にくわえて私に差し出した。

「これを」

「これは・・・？」

私は宝石を手にとった。

「それはデバイスといって、魔法を使うための道具のようなものです」

「デバイス」

「それを使えば、あなたの中に眠っている力を目覚めさせることができます」

「眠っている・・・力？私に・・・そんなものが？」

「はい」

フェレットさんは迷わず頷いた。私にも力がある。なら・・・  
燎くんの力になれるかもしれない！

「フェレットさん！使い方を教えて！私、燎くんを助けたい！！」

そう言ったとき、私の心に迷いはありませんでした。初めてあったとき、私を暗闇から救ってくれた燎くん。大切なことをたくさん教えてくれた燎くん。燎くんのおかげで私は家族とも向き合えたり、アリサちゃんやずかちゃんとも友達になれた。だからもし、燎くんが困っていたら、苦しんでいたら今度は私が燎くんを助ける。ずっとそう思っていました。だから……。

「私は戦う。私の力で燎くんを……大切な人たちを護れるなら。私は……戦う!!」

キイイイイイン!!!

「ふえっ!？」

「これは……」

手が暖かくなっていくのを感じて見てみると、私の手にある宝石が輝いていました。

「デバイスが……あなたを主にした……」

「え？」

「いいですか？これから僕が言うことに続いて言って下さい」

「う、うん」

「いきますよ……我、使命を受けし者なり」

「我、使命を受けし者なり」

私はフェレットさんに言われたとおり続いて言葉を紡ぐ。それはまるで呪文のような言葉。

「契約の下、その力を解き放て」

「契約の下、その力を解き放て」

「風は空に、星は天に」

「風は空に、星は天に」

その呪文を紡ぐたびに私の中にある心臓じゃない何かが激しく脈打つのが分かる。

「そして、不屈の心は・・・」

「そして、不屈の心は・・・」

最後の呪文を紡ぐ。鼓動が最大にまで高まる。

「この胸に！！！！」

ドクンッ！！

「この手に魔法を！！！！」

私は腕を上げデバイスを高く翳した。そしてこれから一緒に戦っていく私の相棒の名前を呼んだ。

「レイジングハート・・・セットアップ!!」

『スタンバイレディ・・・セットアップ!!』

レイジングハートの声が聞こえて桜色の光が私の体を包み込んだ。

S i d e  
療

思念体と戦っていると、後ろから凄まじい魔力を感じて振り返ると桜色の閃光が天を衝かんばかりに伸び上がっていた。その光景はどこか神秘的なものを感じさせるものだった。

「魔法少女の誕生だな」

俺はそんなことを呟いた。

今、少女の物語は幕を上げた。



#### 無印編 第四話 魔法少女誕生（後書き）

いかがでしたでしょうか。ついになのは魔法少女として覚醒しました。

さて、今回は皆さんにお願いがあります。

燎の使うオリジナル魔法・技なのですが、なにかいいものか思い浮かんだなら是非とも送っていただければいいと思います。もちろん私のほうでも考えていますが一人だとは限り限界があるので、できたら協力していただけるとありがたいです。

ほかにも感想・意見・誤字脱字の指摘等、どんどん送ってください。お待ちしております。

それではまた次回をお楽しみに。

ご協力お願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4122x/>

---

魔法少女リリカルなのは～運命を変えし転生者～

2011年11月21日17時42分発行